

ジャー・ラマとコブド問題

——モンゴル人民共和国形成期における民族問題の一考察——

生 駒 雅 則

【要約】 本稿では、西部モンゴル人の反清独立闘争のシンボル「アムルサナーの化身」として出現したカルムイク・モンゴル人ジャー・ラマの行動を通して、モンゴル人民共和国形成期の民族問題を考察する。彼は一九一二年にコブド解放戦の先頭に立ったが、現在彼の功績は全く評価されていない。性急なロシア式改革で住民の支持を失い、強烈な独立志向ゆえに一九一四年にロシア当局に逮捕された彼は、ロシア革命で出獄して一九一八年夏モンゴルに現われ、民衆に再び歓迎されたが、ボグド政府には対抗勢力とみなされた。彼が「封建・君主主義的民族主義」者としてよりもむしろ、東部モンゴル人主導に対する反政府勢力として人民政府によって排除されたことは、彼と対照的に、両政府の要人であり続けたマクサルジャブの運命が暗示している。一九二二年末のジャー・ラマ排除によってコブド地区はハルハに統合されたが、複雑な民族関係に由来するコブド問題は未解決のまま残されることになったのである。

史林 七二巻三号 一九八九年五月

はじめに

モンゴル人民共和国の西部辺境に位置するコブド(科布多)地区の歴史は、従来モンゴル人民共和国ではほとんど取り扱われて来なかった。その歴史書にはゴングルの著作があるぐらいである。それはこの地域の特種性から生まれた種々の難問のためであろう。コブド地区の民族的特種性を要約すれば、次のようになるであろう。②

a. モンゴル族以外にトルコ系のカザフ族なども住み、民族構成が複雑であること。

b 東部モンゴル人と西部モンゴル人の間で係争の地であったこと。

c 十八世紀半ばの反清独立闘争であるアムルサナーの乱の舞台であったこと。^③

d 一九〇七年のコブド・アルタイ分治に至る種族間の根強い対立が、西部モンゴル諸族にも存在したこと。

これらは複雑な民族・種族構成とそれを利用した清朝の政策に起因するものであるが、モンゴル革命に重要な問題をもたらした。例えば、その住民の大部分が西部モンゴル人、即ち非ハルハであるコブド地区は、絶えずハルハへの対抗意識と分離独立傾向を内包していたために、白軍一掃後も反政府運動が多発した。^④しかし東部モンゴル人主導の党・政府やソ連からは、西部解放戦での赤軍やモンゴル人民義勇軍への高い評価に押しやられて、コブド地区の特殊性が十分考慮されることなく、コブド人民の反政府抗議行動は聖俗封建領主層に指導された「反革命」として一方的に断罪されてきた。

西側の研究者の間では、早くからモンゴル民族運動が取り上げられ、コブド問題も注目されてきた。しかしその多くには東西・米ソ対立が反映されて、正当な評価がなされてこなかった。^⑤それは、例えば、モンゴル革命に対するソヴィエト赤軍の介入による陰謀説などに見られる通りである。

我国では、西部モンゴル人のオイラート研究に近年大いに進展が見られる。^⑦だがほとんどがジュンガル王国の成立過程や清朝との関係を扱い、時期的にも清朝前期、十八世紀半ばまでに限られている。モンゴル人民共和国形成期のコブド問題は、史料制約もあって十分研究がなされていない。^⑧

ここでは、清末民国初期に「アムルサナーの化身」として出現し、一九二二年末に「封建・君主主義的民族主義」者として排除された、西部モンゴル民族解放運動の指導的人物ジャー・ラマの行動を中心に、現在モンゴルで高い評価を与えられている人物マクサルジャブラとの比較、コミンテルンや党・政府の対コブド政策の検討などを通して、モンゴル人民共和国形成期の民族問題について若干の考察を試みたい。

- ① И. Гонор, *Xoobun xypaиzиr mpx* (Yrangaap, 1954) 『ハナ下簡史』。
- ② 拙稿「清末の西部モンゴルにおける『アムルサナーの化身』出現の背景について」『神戸大学史学年報』第四号参照。
- ③ アムルサナー〔阿睦爾撒納〕は、ジュンガル王国でダワチとの権力争いに敗れて清朝に亡命し、清のジュンガル遠征軍副將軍にまで取り立てられたが、ジュンガル王国滅亡後はオイラト・ハン位を欲して入れられず、清朝に反旗を翻した人物。彼に対して、モンゴル人民共和国では「モンゴル民族独立（武装）闘争の英雄」、ソ連では「反清独立闘争の英雄」、中華人民共和国では「民族分裂分子」と評価されている。
- ④ Edward Dunn, *The Truth about Outer Mongolia* (Shanghai, 1935), p. 26. 及び三島康夫・後藤富男『外蒙人民共和国——ソ連極東の前衛——』（伊藤書店、一九三九年）第六章「外蒙の反ソ独立抗争史」参照。
- ⑤ ゴリマンはアメリカのモンゴル現代史研究に二つの傾向が、即ちラティモアに代表される民主主義的傾向と、ルーベン、バリス、マーフィなど多数派を占める反動的傾向があると決めている。これら両派の代表作とされるのが、O. Lattimore, *Nomads and Commissars* (New York, 1962) と R. A. Rupen, *Mongols of the Twentieth Century* (Bloomington, 1964) である。M. N. Tonahau, *Problems* (Leiden, 1955), pp. 55-56.
- ⑥ 磯野富士子氏は陰謀説に反論を試みられている。磯野富士子「モンゴル革命に対するソビエト・ロシアの軍事介入について」『東洋学報』第六二巻第三・四号参照。
- ⑦ 近年の我国におけるオイラト史研究には岡田英弘、若松寛、森川哲雄、宮脇淳子、屋敷健一氏らの業績がある。
- ⑧ モンゴル人民共和国の形成期を扱う研究には、戦前は矢野仁一、後藤富男、入江啓四郎氏らの、戦後は坂本忠、田中克彦、磯野富士子、木村英亮、小賀雅男、中見立夫、二本博史氏らの業績がある。
- ⑨ *Нояз Наморун туган заруузынхо Наморун* (Москва, 1952). 橋本弘毅訳『東方諸国の新しい歴史』第三分冊（青木書店、一九五六年）六七九頁。小賀雅男「モンゴルにおける歴史研究とわれわれ」『歴史学研究』四三九号も参照。
- ⑩ ラティモアは、はじめ“Jaa Lama”という語が中国語の“chia lama”（偽のラマ）のモンゴル語発音と考えていたが、当時モンゴルでは要人の名前を省略するのが一般的であった故に、西部モンゴル方言の Damjattsan の後半部分を省略したものとみるべきだと指摘している。Owen Lattimore, *Nationalism and Revolution in Mongolia* (Leiden, 1955), pp. 55-56.

第一章 「アムルサナーの化身」ジャー・ラマ

一 「アムルサナーの化身」ジャー・ラマ

ロシア人ボズドネエフは、一八九二〜九三年の旅行記で、「アムルサナーの化身」ダンビ・ジャンツァン出現の噂に言

及している。彼は、キャフタからウルガ〔庫倫、現在のウランバートル〕へ向かう途中、アムール・バイスラント〔慶寧寺〕のビチエチ〔筆帖式〕ヨンドン〔雲惇〕と会談したことに基づいて、次のように叙述している。

「このラマ〔雲惇〕との会話が、我国〔ロシア〕の政策に及んだ。雲惇ビチエチは私に、ダンビ・ジャンツァンの噂を何か聞いたことがないか、と密かにたずねたが、この時、この名を持つ年齢約三十〜四十歳の現在有名なラマが、去年〔一九八一年〕の秋にモンゴルを旅行したことを説明した。ダンビ・ジャンツァンはジンジリクカ倫からモンゴルに入り、ウリヤスタイを通過して駅通でウルガへ彼かい、その後再び駅通でキャフタまで旅した。彼はモンゴル人たちに自分がアムルサナーの孫であると述べた。……さらに彼は、自分がモンゴル人を中国の支配から解放すること、そのためにまもなく北方から軍隊を率いて現われるであろうことを、至る所で吹聴した。……最近の〔雲惇との〕会談から、雲惇もすべてのモンゴル人も、この人物が本当にアムルサナーの孫であり、ダンビ・ジャンツァンによって述べられたことがすべて正しいとさえ今も信じていることが、私には全く明らかになった。……モンゴル人が問題にしているのは、ウルガに到着するとすぐにウルガの領事館に逮捕され、尋問後護送囚人としてロシア国内に送られた、アストラハン県マールラトルベート・ウルスのロシア・カルムイク人のあるベテン師のことらしい」。

ボズドネエフは、ダンビ・ジャンツァン出現の噂の原因を調べて次のように結論づけた。

「その根本的原因は、民衆の自国政府〔清朝〕に対するひどい不満、時にそれへの憎悪、ついには中国人がモンゴル人の生活を包囲した生活上の重圧から救われたいという、受動的ではあるが、渴望するような願望である。驚いたことには、その多くのものが、私に語ったように、「北京の」宮廷への旅行によって中国風に染まり、中国に心を惹かれ、民衆を搾取し、最もひどいことには、信仰を侮辱しさえしたモンゴル王侯自身に対する民衆の不満さえここで聞いた」。

ボズドネエフの鋭い観察にあるように、清朝政府に対してだけでなくモンゴル土着支配層に対しても不満を抱くモンゴル民衆は、「アムルサナーの化身」の出現を待望して止まなかったのである。

ジャール・ラマの生い立ちには不明点が多い。一九二六〜二七年にモンゴル人民共和国に滞在したユーリ・レーリヒは、次のように述べているが、真偽は明らかでない。

「彼の本名はバル・デンであった。彼は南ロシアのアストラハンに生まれ、小トルバート族に属していた。少年期初めにモンゴルに連れて来られ、中国国境のドロ・ノール大寺院に見習僧として入門した。ここから遠くチベットに旅行し、モンゴル僧の大部が住むドレ・ブンのラサ大寺院のゴ・マン・ダツァン（学寮）で多年を過ごした」^③。

また一九一八年に自治モンゴルを訪れ、後にはイギリス大使にまでなったマイスキーは、次のように述べている。

「アストラハン・カルムイク出身のダンビ・ジャンツァンは、一八九〇年頃ハルハに現われ、モンゴル独立思想を宣伝し始めた。

彼がどこからここへ来たのか、以前はどこに住んでいたのか、何に従事していたのか全く不明である。七年間ドロ・ノール（南部モンゴル）の仏教寺院に就学させられ、そこで仏教学の初歩を修め、その後チベットで最高の教義を究めたと、ジャー・ラマ自らあるとき語ったが、これが事実かどうかわからない。ジャー・ラマの宣伝は若干の成功を収めた。ハンダ（ハンダドルジ）親王を含む三名の王侯とジャルハンザ・ホトクトとイラダサン・ホトクトの二名の教会最高代表者が彼に与した」^④。

当時親露派の代表と目されたハンダドルジ親王や、西部モンゴルで最高の宗教的權威を持つジャルハンザ・ホトクトらが、アストラハン・カルムイク人ジャー・ラマに共鳴したことは、非常に興味深い。

この後一時姿を消したジャー・ラマは、ボズドネエフが述べているように、一八九一年秋に、チベットからロシアに向かう途中で中国官憲に拘留され、ウリヤスタイに護送された。その時彼の要請により、ロシア商人クリヤゼフが彼のトランクを開けて、アストラハン・カルムイク人ダンビ・ジャンツァン名義の証明書を取り出したところ、中国人は受け取った資料に満足して、トランクの残りの中身を調べないで釈放したために、彼は救われた。トランクにはモンゴル人に中国の軛の打倒を呼び掛ける宣伝文書が一杯詰まっていたという。^⑤

ジャー・ラマはその後コブドへ行き、しばらくロシア商人ヴァセネフのもとで暮らしたが、ウリヤスタイに戻ってロシア領事シマリョフと共にウルガへ赴いた。そこからキャフタに向かい、一〇年間行方不明となった。^⑥

ジャー・ラマが次に現われたのは一九〇〇年のことである。彼は「シレン・ラマ」という名前で、コズロフのチベット

探検隊の案内人として登場した。コズロフによってラサに派遣されたジャー・ラマは、ラサからの帰途、指定された会合場所でもコズロフを見つけることができなかったといつて、カラシャールの王侯のもとにやって来た。彼は、当地で商業を営んでいたクリヤゼフと共にコブドに行き、さらにウルガに向かった。間もなくコブドに戻って来て、ウルガのロシア領事シマリョフの依頼でコズロフ探検隊の捜索に出かけたが、再び約一〇年間姿を隠してしまった。^⑦

一九一〇年に突然、ジャー・ラマはカラシャールのクリヤゼフのもとに現われたが、再び名前を変え、容貌を若干違えてさえた。以前は彼は髭をはやしていたが、今や髭をそっていた。彼はコブドへ移り、一九一二年春ハンゲリツィクに行き、トルバート王侯チュメン公のもとに留まった。^⑧

一八九五年から三十年間西部モンゴルに滞在したブルドゥコフによれば、一九一〇年に現われたジャー・ラマは、

「外見は四〇歳過ぎで中背の頑丈な体格で、モンゴル人特有の顔立をしていた。……彼の服装は褐色の中国式のゆるやかなものであったが、その奇妙なコスチュームの下からヨーロッパ式軍服の襟が見えていたし、足には丈の高いロシアの旅行用長靴を履いていた。彼はオイラト方言をしゃべり、盛んに旅行したというインドや中国、チベット、ロシアについて語った。北京滞在中はジャルハンザ・ホトクト衙門（モンゴルの層を作成し、宗教・哲学や天文学、その他の問題を研究した機関）で人六の大ラマの一人として勤務したと伝えられている。これらすべての話がどれほど正しいかは私にはわからないが、ジャー・ラマが『老練な人物』であったこと、実際に世界中を随分放浪したことは疑う余地がない。彼の言及した国々に関する知識は非常に正確で詳細であったからである。その後知ったことだが、ジャー・ラマはモンゴル語以外に中国語、チベット語、サンスクリット語、若干のロシア語を自由にしゃべることができた」^⑩（傍線―筆者）。

ブルドゥコフは、一九一〇年のジャー・ラマが一八九〇年代の人物と同一人物であるか疑わしいとみる。^⑪ ポズドネエフが一八九一年の人物を三十一歳としていたことを考えれば、ブルドゥコフの言うように、同一人物でなかったと思われる。当時は、ベンニンゲンセンが述べるように、「若し蒙古を支那に敵対せしめんと欲すれば、我は蒙古に向け何人か有

力なるアムールサンを派し、ブリヤート人或はカルムイク人より成れる我がカザク騎兵数百を全国内に散布するのみにて足る」(傍線―筆者)情勢で、多数の「ベテン師」のような人物が「アムルサナーの化身」を詐称したようである。

ジャー・ラマは、自分がアムルサナーの後裔、生まれ変わりで、モンゴル独立闘争の最後の英雄が中国の軛から祖国を解放するために自分に体现されたと「内密に」伝えたことは、トルベート人の間でセンセーションを引き起こした。彼はダンビ・ジャンツァンと公然と自称していたわけではなかった。^⑬コブド管区の住民は最も激しく興奮し、祖国の救世主と見なされたジャー・ラマのもとに王侯、ラマ、平民たちが集まり、彼に家畜や銀、織物などを寄付した。^⑭

こうして「アムルサナーの化身」ジャー・ラマは、モンゴル民族の反清独立闘争の英雄として、特にコブド住民の「救世主」として登場し、次に述べる一九一二年のコブド解放戦の功績によりコブドの事実上の支配者となるのである。

- ① A. Позднеев, *Монголия и Монголы: Резюме поездки в Монголию, исполненной в 1892-1893 гг.*, том I. (Сп.-Петербург, 1896), стр. 45-46. 『モンゴル及びモンゴル人』一八九二―一八九三年になされたモンゴル旅行の報告』第一巻。なお東亜同文会訳『蒙古及蒙古人』(東亜同文会、一九〇八年)の翻訳は正確さに欠ける。
- ② Там же, стр. 46.
- ③ George N. Roerich, *Trails to Innermost Asia: Five Years of Exploration with the Roerich Central Asian Expedition* (New Haven, 1931), p. 224.
- ④ И. Майский, *Современная Монголия* (Иркутск, 1921), стр. 255. 『現代のモンゴル』。
- ⑤ Там же.
- ⑥ Там же. 彼はその後ツァイダムと北東チベットを頻繁に訪れてゐたこと。Roerich, *op. cit.*, p. 225.
- ⑦ Майский, *указ. соч.*, стр. 255-256.
- ⑧ Там же, стр. 256.
- ⑨ А. В. Бурдуков, "В Западной Монголии в 1921 году," С. М. Вуденный и др., *Народы братья: советско-монгольская дружба восточников и статьи* (Москва, 1965), стр. 36. 「一九二一年の西部モンゴルにて」エス・エム・ウデンヌイ他編『兄弟の諸民族』ソヴィエト・モンゴルの友好、回想と論稿』所収。スタリツィナの註によれば、ブルドゥコフ(一八八三―一九四三年)は、一九二一―一九二三年西部モンゴルの民族解放運動指導者を援助、一四年ロシア商業勤労者組合を組織、二年七月マクスサルジャブの決起を目撃、二一―二六年ソ連ソモントロナエズ勤務、二七年レニングラード東洋研究所勤務、三四年レニングラード国立大学モンゴル語教師、四二年不当逮捕、翌年獄死。
- ⑩ Майский, *указ. соч.*, стр. 256.
- ⑪ А. В. Бурдуков, *В старой и новой Монголии* (Москва, 1969), стр. 68. 『旧モンゴルと新モンゴルについて』。なをルーベンはジャー・ラ

1860年生れた¹⁰。Robert A. Rupen, *How Mongolia Is Really Ruled* (Stanford, 1979), p. 9.

¹² ア・ペ・ニンニンゲン著、農商務省商工局訳『現代蒙古』(時事

彙存社、一九二二年) 一一〇頁。

¹³ Бүдүүхон, Б чинагол у нонол Монголдуу, срг. 68.

¹⁴ Материи, ука3. соу, срг. 256.

二 「ノモン・ホトクト」ジャー・ラマ

ジャー・ラマが現われた一九一二年春のコブド地区は、前年末に成立したボグド・ハーン政権に加わるか、それとも中国の主権動に留まるかという瀬戸際に立たされていた。庫倫やウリヤスタイの清朝官憲はすでに戦わずして降伏していたが、コブドの中国官憲はあくまで抵抗の姿勢を貫いたからである。コブド参贊大臣薄潤は、駐防正規軍三百名以外に、管内のモンゴル人を招募し、千名の兵でコブドの警備を固めた。^①

ジャー・ラマは、ボグド・ハーンの「大モンゴル国」への加盟を熱心に主張して、コブド住民を説伏した。彼は中国軍に宣戦を布告し、トルベート人やハルハ人、ウリヤンハイ人、トルグート人など約三千人を動員して、一九二二年五月にコブド市へ攻め込んだ。^② ユーリ・レーリヒはこの時の模様を次のように記している。

「ここには、独特の高い帽子と黄色と紫色のコートを着用し、モーゼル銃とベルデン・ライフルで武装したハルハ・モンゴル人や、小さな丸い帽子と黄色いコート、ごてごてした銀飾り付きの弾帯を身につけていたチャハル・モンゴル人、尖った毛皮の帽子と毛皮のコートを着用したウリヤンハイ出身のソョート人、頭に青いハンカチを被り、緑のコートと皮のサンダルを身につけたブルグン出身のトルグート人がいた。前進しつつある部隊は公式にはスルン「ダムディンスレン」王公に指揮されていたが、実際はすべての事業がジャー・ラマに鼓舞され指導されていた」^③

現在のモンゴルでは、ダムディンスレンやマクサルジャブらの活躍だけが高く評価されているが、ここに述べられているように、実際にはジャー・ラマがコブド解放戦の先頭に立って活躍した。ジャー・ラマが重要な役割を果たしたことは、後に述べる、コブド戦の功労者に与えたボグド・ハーンの恩賞からも明らかである。

コブドの中国当局がグチェン「古城」及びアルタイ管区長トルグート郡王バルタのいるシャラ・スメ「承化寺」へ援助を求めたところ、グチェンから三百名、シャラ・スメから百三十名の増援隊が派遣されたが、その到着前にコブドはモンゴル軍に降伏した。約三か月の攻囲戦後、八月六日にコブド市街が降伏し、翌七日には城塞も陥落した。

「コブドの破壊と中国入植民の虐殺後、約十人の中国人とモハメット教徒「カザフ」の商人が、ジャー・ラマの命令により秘密の儀式で殺戮された。十人の人間の胸が切り裂かれ、ジャー・ラマ自身によって心臓が引きちぎられ、さらに彼は人間の血をモンゴル戦旗に塗り、部隊の上に振り注いだ」^⑤。

この時ジャー・ラマが中国人捕虜と共にカザフ商人も殺害したことに注目しておきたい。さらに彼は約千人の中国人捕虜全員の銃殺を主張したが、ロシア領事クズミンスキーらの干渉で、大部分の中国人捕虜はロシア人の保護下ビースク經由で中国本土へ帰還することができた。^⑥

新疆からの援軍は、露蒙両代表と交渉した結果、コブド南西約三百二十キロにあるツァガン・トングに、ジャー・ラマの率いるモンゴル軍は同百八十キロ地点のウラン・ダバー峠に、冬営することになった。こうして両軍は対峙したまま、翌年春には解散してしまい、コブド戦はモンゴル側の勝利に終わった。

コブド地区での兵士募集活動と中国増援軍の阻止においてジャー・ラマが果たした役割は特に重要であった。というのは、ブルドゥコフが指摘するように^⑦、当時のマクサルジャブはまだ無名で権威がなく、兵士募集が思うように進まなかったからである。このようにコブド解放戦でのジャー・ラマの役割は非常に大きかったにもかかわらず、モンゴル人民共和国の公式歴史書では言及されていない。これはジャー・ラマが後に「反革命」勢力として排除されたためであろう。ゴングルは、ジャー・ラマが「一九一二年のコブド解放戦に参加しなかったばかりでなく、モンゴル人民の独立の脅威ある敵で、人民革命後はボドーの反革命的陰謀に共謀した外国のスパイであった」^⑧とさえ書いている。

コブド戦の功労者に対する国王ボグド・ハーンの恩賞は次のようであった。ジャルハンザ・ホトクトに「經典の懐想的

教師・ハン」の尊称と印綬を、ダムディンスレン貝子に「マンライ・バートル（先駆の英雄）」の尊称と郡王の爵位を、マクサルジャブ貝子に「ハタン・バートル（不屈の英雄）」の尊称と貝勒の爵位を、ナバーン貝子に「ゾリクト（勇敢な人）」の尊称と郡王の爵位及び「コブド・サイト（コブド管区長官）」の地位を、ゲンデン台吉とバヤル台吉に公の爵位を、その他全ての功労者には「バートル（英雄）」の尊称と爵位に応じたジンス（頂子）とオトゴ（孔雀の羽飾り）が授けられた。⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅 㽆 㽇 㽈 㽉 㽊 㽋 㽌 㽍 㽎 㽏 㽐 㽑 㽒 㽓 㽔 㽕 㽖 㽗 㽘 㽙 㽚 㽛 㽜 㽝 㽞 㽟 㽠 㽡 㽢 㽣 㽤 㽥 㽦 㽧 㽨 㽩 㽪 㽫 㽬 㽭 㽮 㽯 㽰 㽱 㽲 㽳 㽴 㽵 㽶 㽷 㽸 㽹 㽺 㽻 㽼 㽽 㽾 㽿 㿀 㿁 㿂 㿃 㿄 㿅 㿆 㿇 㿈 㿉 㿊 㿋 㿌 㿍 㿎 㿏 㿐 㿑 㿒 㿓 㿔 㿕 㿖 㿗 㿘 㿙 㿚 㿛 㿜 㿝 㿞 㿟 㿠 㿡 㿢 㿣 㿤 㿥 㿦 㿧 㿨 㿩 㿪 㿫 㿬 㿭 㿮 㿯 㿰 㿱 㿲 㿳 㿴 㿵 㿶 㿷 㿸 㿹 㿺 㿻 㿼 㿽 㿾

もに「清朝王朝」「世代忠良」「嫡系王公」で「君主立憲」と蒙旗制度の維持を訴えていた。盧明輝「辛亥革命与蒙古地区的『民族運動』」吉林省社会科学院『社会科学戦線』一九八一年四期、九二頁。彼は一九〇六年と一七年来日しており、親日家でもあった。春日行雄「日本とモンゴルの百年(年表・資料)」「外交時報」一〇五八号、八八、九三頁。

⑤ Roerich, *op. cit.*, p. 227. これはシャー・ニズムの供儀として伝わる心臓摘出の風習に由来するものであって、必ずしもシャー・ラマ個人の残虐を示すものではない。敵兵の心臓を引きずり去ってその鮮血を軍旗に降り注ぐという風習は、一九一〇年代でもなおモンゴル将師たちによって行われており、マクスアルジャブやダムディンスレンらもこれを行っていた。ワルター・ハイシヒ著、田中克彦訳『モンゴルの歴史と文化』(岩波書店、一九六七年)一〇〇～一〇二頁。

⑥ Мацкнй, *указ. соч.*, стр. 256-257.

⑦ Бурыков, *В степях и новой Монголии*, стр. 73.

⑧ Голор, *вместе сохноа*, 107-р тир.

⑨ ジャルハンザ・ホトクト(？～一九三三年)はディラヴ・ホトクトの親類。ザサクト・ハン部の彼の領地には一九一八年にシャビ二千三名、帳幕五百四十五と家畜一万三千三百二十六頭がいた。Мацкнй, *указ. соч.*, приложения, стр. 9.

⑩ ダムディンスレン(一八七二～一九二〇年)は、ホロンバイル新バールガ出身の軍事専門家で、ボグド・ハーン国成立に対応して一九二

一年一月にホロンバイルの独立を宣言し、彼自身ボグド政権の軍事大臣となった。一九二〇年七月に中国軍に逮捕されて獄死した。田中克彦『草原の革命家たち』(中央公論社、一九七三年)四八～七六頁参照。

⑪ マクスアルジャブ(一八七八～一九二七年)は、一九二二～二三年の革命時も西部戦で活躍し、人民党・政府から「アルジャン・ハタン・ハートル(人民の不屈の英雄)」の称号を授与された。Kh. Choibalsan, "A Brief History of the People's Indomitable Hero Magarjav," *Urgunge Onon* (tr. & ed.), *Mongolian Heroes of the Twentieth Century* (New York, 1976), Chapter 4; B. Shperliab, *Arbun Khanbaidanar Makarjavai namur* (Ulaanbaatar, 1978). 『人民の不屈の英雄マクスアルジャブ伝』参照。

⑫ Owen Lattimore & Fujiko Isono, *The Dulu Khutagt: Memoirs and Autobiography of a Mongol Buddhist Reincarnation in Religion and Revolution* (Weisbaden, 1982), pp. 75-76.

⑬ 王侯に授与された六つの爵位は上位から「和碩親王」「多羅貝勒」「固山貝子」「鎮国公」「輔国公」。

⑭ Бурыков, *В степях и новой Монголии*, стр. 76-77.

⑮ 田山茂『清代における蒙古の社会制度』(文京書院、一九五四年)一四頁。

⑯ Бурыков, *В степях и новой Монголии*, стр. 80.

⑰ Мацкнй, *указ. соч.*, стр. 257.

第二章 ジャー・ラマのコブド統治

一 ジャー・ラマのコブド統治

ジャー・ラマは、一九一三年八月初めにコブド南部の「キルギス族」の反乱を鎮圧してから独立的傾向を顕著に示し始めたといわれる。^①当時のロシア人はカザフとカザーク、キルギスの区別が曖昧で、カザフのことをキルギスと呼んでおり、この場合も「キルギス族」はカザフ族の意味である。

カザフ族に対するカルムイク人の反感には特別なものがあつた。というのはアムルサナーの乱が鎮圧され、新疆や西部モンゴルが清朝の支配下に入つた一八世紀後半に、ヴォルガ沿岸のトルグート族がイリ帰牧を遂げた時、途中で「キルギス族」やカザークの襲撃を受けてイリに無事にたどり着くことができたのが、出発時の約半数の三万余戸に過ぎなかつたという苦い体験があるからである。^②一九一三年の「キルギス族」の反乱鎮圧だけでなく、一九一二年のコブド戦で中国人捕虜と共にカザフ商人に対してもジャー・ラマが処刑を行つたことからわかるように、一九一〇年代でもなおカルムイク人のカザフ族に対する反感は、中国人に対する反感に勝るとも劣らないものがあつた。

コブド地区の事実上の支配者となつたジャー・ラマは、それでは、いかなる統治政策を採つたのであろうか。マイスキーは、一九二一年発行の著書『現代のモンゴル』の中で、ジャー・ラマがその精力的で厳格な特性を発揮して、彼の憧憬するピョートル大帝に倣つて諸改革に取り組んだと述べている。^③ジャー・ラマは、ピョートル大帝の「上からの改革」をモデルにして、モンゴルの西欧化、近代化を目指したようである。

ジャー・ラマは、まず手始めに、コブドという都市がモンゴル人には無用の地だと考えて、コブド河畔にある自領の中心地ムンジクに管区の中心を移そうとした。その理由は、コブド付近には薪が無く、荒野で、飼料不足、人口希薄のためというものであつた。^④確かに、本来コブド市は、十八世紀半ばに中国軍の軍事的戦略的拠点として建設されたものであり、

遊牧生活を送る大部分のモンゴル人には不必要なものであったかもしれないが、その移転には膨大な資金が必要であった。そのためコブド地区の民衆には新たな負担が課せられることになった。

またジャー・ラマは、一九一三年秋にムンジクに新たにラマ寺廟を創設して、コブドの全寺廟をそれに統合しようとした。^⑤ 彼はウランコム^⑥のラマの半分をムンジクの寺廟に集め、さらにモンゴル人には不慣れた清潔さを要求した。

コブド北部のウランコム地域とウブス湖畔に分布するトルベート族は、すでに述べたように、ジュンガル部に反感を持ち、オイラート・モンゴル人の中で最初に清朝に帰属した種族である。一九一二年のコブド解放戦の時も、庫倫政府への統合をいち早く決定した。庫倫政府から独立した行動をとろうとするジャー・ラマにとっては、単にウランコム^⑦のラマたちの影響力を掌握するだけでなく、比較的親庫倫政府的なトルベート族の動きを制する必要があるであらう。

ジャー・ラマはその他にも多くの改革を導入した。農業を普及させようとして、ブルドゥコフに依頼して、ロシアから一五〇一六丁の鋤を輸入した。^⑧ またロシア式住宅の建設や冬季用の干草刈り、家畜の品種改良、ロシア服・靴の着用などを命じ、学校の開設や軍隊のヨーロッパ式装備と訓練、ラマ教の制限とラマの軍隊召集なども行った。^⑨

彼の一連の性急なロシア式改革はモンゴルの実情に適合せず、王侯・ラマはもとより、一般大衆の間でも大きな不満を呼び起こした。事がうまく進まない時、彼はピョートル式「棍棒」政策で対処した。ウランコム^⑩のトルベート・ラマたちが彼の命令に反抗した時には、約十名のラマが死ぬまで鞭打たれた。^⑪

彼は約五百名のヨーロッパ式軍隊を育成し、ジュンガル、東トルキスタン、チベットの一部及び西部モンゴルを征服して、ジュンガル王国のハンであったガルダンやツェワン・ラプタン^⑫の名誉回復を一途に考えていたといわれる。

これは、ジャー・ラマの単なる個人的野心とみるべきではなく、彼がオイラート・モンゴル人の独立国家再建の願望を實現しようとしたとみるべきであらう。だが当時の内外情勢を充分考慮することなく実行に着手しようとした彼の行動は、コブドの支配層だけでなく、重い負担を強いられる一般住民からも、やがて支持を失うのは必然的であった。

一九一三年九月の新たな称号「ノモン・ハン・ホトクト」^⑩ 授与祝典の頃に住民から最高の庇護者と見なされていた彼は、諸改革実施による重税のためにまもなく冒険家、ペテン師と見なされるに至った。^⑪

① 中国軍がモンゴル人との不和反目を利用して反乱を熾付たらしめ。

Будуков, В старой и новой Монголии, стр. 99.

② 祁韻士纂『皇朝藩部要略』巻十四、厄魯特要略六(文海出版社印行、一九六五年版)七六二〜七六三頁。

③ Майский, указ. соч., стр. 257. ただし改訂版の *Монголия накануне революции* (Москва, 1959) 『革命前夜のモンゴル』では、ビョートル大帝の記述がすべて削除されるなど、ジャー・ラマに関する記述が大幅に削られ、書き直されてゐる。

④ Будуков, В старой и новой Монголии, стр. 118.

⑤ Там же, стр. 106.

⑥ Там же, стр. 111.

⑦ Майский, указ. соч., стр. 257.

⑧ Roerich, *op. cit.*, p. 228.

⑨ Майский, указ. соч., стр. 257. トルベート・ラマたちは「ノモン

二 ジャー・ラマの逮捕

ジャー・ラマの独走は、コブドのロシア領事リューバやロシア・カザーク隊長カザコフ大佐との不和反目を招いた。その直接的原因は、ロシア軍への馬匹飼料供給問題であった。^⑫ 一九一三年夏にビースクからロシア・カザーク歩兵・砲兵約三千名がコブドに到着していたが、^⑬ コブドは飼料不足であったためにこの問題が生じた。一九一四年一月十五日にコシ・アガチでマクサルジャブと会った時、ブルドゥコフは彼からダンビ・ジャンツァンとロシア人との衝突が尖鋭化していること、また内モンゴル出身のバイル台吉とも不和が生じていることを聞いている。^⑭

〔領主〕やミヤンダクタン〔仏教上の知識階級〕、トシャールタン

〔命令権を持つ人々〕と闘う時に、その住居を取り囲んで裁判・処刑の儀式を行なうという特別な闘争形態：хантиг босгох。あるいは“хантигх”を取っていた。ジャー・ラマが一九一三年にホイト族

(アムルサナアの出身種族)の十寺廟を中心にしてトルベート二旗の二十七寺廟を強制的に統合・支配しようとした時、トルベート・ラマたちは彼を「ハシガ」しようとして敗れ、処刑された。Ш. Пандуров, *Ар Монголд зарсан ардын хөдөлгөөн* (Уланбаатар, 1956), 101-102-р тал. 『外モンゴルに起こった牧民運動』

⑩ Майский, указ. соч., стр. 257.

⑪ 「ノモン・ハン」とは「法王」の意味。橋本光賢『蒙古の喇嘛教』(仏教公論社、一九四二年)二二三頁。

⑫ Будуков, В старой и новой Монголии, стр. 106.

当時シヤラ・スメのロシア領事クズミンスキーの仲介で、アルタイ管区長官バルタとの交渉が進展し、一九一三年十二月には休戦とツァガン・トング線による境界線画定の臨時措置が取られて、一応事態は鎮静化しつつあった。それでもなお緊張をもたらす次のような事情があった。^⑤

(一) ダンビ・ジャンツァンの行動に対するコブドのロシア軍及び住民の不満。

(二) 多数のハルハ・モンゴル軍がムンジクに集合していること。

(三) ダンビ・ジャンツァンが自らオイラート・ハンを宣言し、ウルガよりむしろ彼に共鳴するハルハ西部二部をコブド管区に統合しようと企図しているという噂の流布。

(四) 病気療養にロシア旅行すべきだという助言に対して、ダンビ・ジャンツァンが曖昧な回答しかしいこと。^⑥

特に(三)の内容は興味深いが、そのためにボグド政府によって(二)にあるハルハ軍が派遣されたものであろう。(三)の噂は、ハルハ西部二部がジュンガル王国時代からオイラート族と緊密な関係にあったためであらう。^⑦

一九一四年二月六日にブラトフ大尉がカザーク部隊を率いてコブドに進出し、数次にわたる戦闘の末、二月八日にジャー・ラマを逮捕し、彼の諸改革は全て中断された。^⑧

では一体、なぜジャー・ラマはロシア軍に逮捕されることになったのであろうか。

マイスキーは、ジャー・ラマ逮捕の理由として、二つの噂を紹介している。モンゴル改革が危険なために、ウルガの命令によって監禁されたという噂と、馬匹飼料問題で駐屯軍隊長と衝突し、隊長の独断で監禁されたという噂である。^⑨

これに対してブルドゥコフは、彼の逮捕が、ペテルブルグの命令によって、ウルガの了解なしに、アストラハン・カルムイク人ダンビ・ジャンツァン・アムルサナーエフという自国ロシア臣民として行なわれたと見ている。^⑩

現在のソ連の見解は、ブルドゥコフの見方とは逆に、西部モンゴル王侯たちの請願によってロシア当局がジャー・ラマを逮捕したとする。一九一四年一月三十一日に、ホイト親王トゥゲメル他の西部モンゴル王侯の請願書を受理したことを、

ウリヤスタイのロシア領事が外務省に報告していること、同年三月二十日に、ジャー・ラマを逮捕してロシアへ追放したという二月十九日付けのウルガからの報告を、ミルレル外務大臣が受けていることが、その証拠として挙げられている。^⑩

ジャー・ラマの逮捕理由は、一九一四年当時のモンゴル内外の情勢から明らかになるように思われる。

ボグド・ハーン政権下では基本的には封建制度が維持されたが、支配層内部では従来からの世襲的王侯と、ジャー・ラマのような独立運動の功績で取り立てられた新興王侯との間で対立が生まれていた。

また清朝の軛を脱したにもかかわらず、中国軍との抗争や国家建設に必要な資金調達でアルバがむしろ増大する傾向にあり、封建層と平民層との間で対立が激化しつつあった。「ドゴラン運動」^⑪は一九一二年以降にも頻発しており、しかもその運動が従来の東部中心からモンゴル全土に著しく広がったことは注目すべきである。特に一九〇三年から一九一八年まで展開された西部ザクト・ハン部の平民アヨシらの運動は、一九一二年までは反高利貸的性格が強かったが、一九一二年以降次第に反封建・反帝国主義的性格を帯びていったとされる。^⑫モンゴル王侯や中国軍閥、その背後の帝国主義諸国に対する不満は、モンゴル人民の自覚を促し、やがてモンゴル人民党の結成へと向かう。

国際関係では、ボグド・ハーン政権は、一九一二年十月に露蒙修好協定と同付属通商議定書を、翌年一月に蒙藏条約を締結し、国際社会へ順調に進出できそうに思われた。ところが実際は、全くはかない夢であった。ロシアは、すでに一九一二年七月の第三次日露協約で内モンゴルの東西分割を含む両国の利害調整をした上で、一九一三年十月に露中宣言を交して、外モンゴルに対する中国の宗主権を承認した。一九一三年十月から翌年一月迄モンゴル首相サイン・ノヨン・ハンがペテルブルグを訪問して抗議したにもかかわらず、一九一五年六月のキャフタ協定で外モンゴルの自治を確認させられる。^⑬外モンゴルはロシアにとっては緩衝国にすぎなかった。

このようなモンゴルの内外情勢を考えると、ジャー・ラマ逮捕の理由は、ソ連の見解にあるように支配層内部の権力闘争でモンゴル王侯・ラマや人民大衆の支持を失ったことだけでなく、彼の強い独立志向のためにロシア当局と不和を招い

たことも十分考えられる。独立の確保が優先された当時としては、むしろ後者の比重が高かったはずである。

逮捕されたジャー・ラマは、コブド、ピースクを経てトムスク監獄に約一年間投獄された後、アレクサンドル中央監獄（イルクーツク付近）へ移され、さらにヤクーツク州へ流された。その後アストラハン県のツァリョーフ市へ転送されて、^⑮最後はアストラハン監獄に一九一八年春まで投獄されることになる。

① リューバは一九〇四〜〇六年ウルガ領事、〇七〜〇九年ヘルピン領事、一〇〜一二年ウリヤスタイ領事、一一年三月〜一三年八月ウルガ総領事、一三〜一五年コブド領事を歴任。Byrdov, B emapoŭ u noŋoi Monzauu, ctp. 383-384.

② Tam ke, ctp. 107.

③ Tam ke, ctp. 99. ロシア政府は一九一三年二月に中国軍の侵攻に備えて、ウルガとウリヤスタイからカザーク兵六百名を、ピースクから工兵・砲兵を含む二大隊をコブドに派遣することを決定していた。

I. J. Korostovets, Von Chinggis Khan zur Sowjetrepublik (Berlin und Leipzig, 1926), S. 240. 高山洋吉訳『蒙古近世史』（森北書店、一九四三年）三八八頁。

④ マクサルジャブは、一九一三年夏に逃亡した「キルギス人」の帰還問題でロシア当局と交渉するためにコシ・フガチに來ていた。Byrdov, B emapoŭ u noŋoi Monzauu, ctp. 110. またバイル台吉は、トクトホ台吉の部隊に参加して一九一二年九月末にコブドにやってくる。その後ワンゲルン軍に加わって、一九二二年キャフタ戦で戦死した。Tam ke, ctp. 384.

⑤ Tam ke, ctp. 113.

⑥ ジャー・ラマが不健康を訴えていたのを、ブルドゥコフは、トムスクその他ロシア各地を旅行して養生するように勧めた。Tam ke, ctp. 114. 病氣を口実にブライドを傷つけずに辞職できるように配慮した

ものであろう。

⑦ 宮脇淳子「モンゴル・オイラート関係史—十三世紀から十七世紀まで—」『アジア・アフリカ言語文化研究』第二十五号参照。

⑧ Roerich, op. cit., p. 229.

⑨ Maickini, ykaz. cov, ctp. 258.

⑩ Byrdov, B emapoŭ u noŋoi Monzauu, ctp. 114.

⑪ Tam ke, ctp. 384-388.

⑫ アルバ（國家の賦役）には、ウルトン（駄運維持）、ウヤ（乗用馬車維持）、兵役・護衛、公勤務、シェーサ（王公費）、フネセ（官吏への食事・住居提供）、ダンスクおよびミンダリ（大汗への献て）、寺廟維持費、法要寄付、軍事費、公的負債返済など少なくとも十七種類はあった。Maickini, ykaz. cov, ctp. 284. 田山茂「外蒙古封建制度の崩壊期における賦役及び中国前期的資本の役割」『史学研究』復刊第三号や、二本博史「ホショー内における平民の貢租・賦役」『内陸アジア史研究』第一号参照。

⑬ 牧民たちが訴訟闘争を行う時、主謀者がわからないように円形（ドイラン）に署名したので名づけられた闘争形態。

⑭ Apdun saccautu ŋuwa (XII-XIX syyni xan) (Yraŋgatar, 1966), Ho. 34~Ho. 42. 『牧民訴訟文書（十八〜二十世紀初）』の第三四一四二番の諸文書は、一九一五〜一九年の牧民訴訟闘争の貴重な記録。特に第三十九番の文書は、ザサクト・ハン部マニバザル貝子旗の牧民

アヨーシらが人民大衆を抑圧・搾取し苦しめた旗長を訴えた文書である。^②

② В. Ширенков, *Мемория Монгольской Народной Революции 1921 года* (Москва, 1971), стр. 75-76. 『一九二一年のモンゴル人民革命史』。村井宗行「アヨーシの牧民運動について」『モンゴル研究』(大阪外大) 第一号や Onon (ed. & tr.), *op. cit.*, Chapter 1, "Arad

Ayush the Commoner." 参考。

③ 中見立夫「一九一三年の露中宣言——中華民国の成立とモンゴル問題——」『国際政治』第六六号参照。

④ 中見立夫「ボグド・ハーン政權の対外交渉努力と帝國主義列強」『アジア・アフリカ言語文化研究』第十七号参照。

⑤ Maickin, *yvaz cov*, стр. 258.

第三章 ロシア革命後のインド

一 ジャー・ラマの再出現

一九一四年以来投獄されていたジャー・ラマは、ロシア革命のおかげで一九一八年春に出獄できた。彼と革命ロシアとの関係を具体的に述べた史料は今のところ見当たらないが、マイスキーは次のように述べてその関連を暗示している。^①

「監獄と流刑による苦難の四年間は『アムルサナーの子孫』にはただではすまなかった。彼はインテリゲンツィアの平和革命に出会っていくらかの思想を習得し、ロシア語に十分熟達し、ロシアの書物と新聞を読んで視野を広げ、多分一九一七—一八年の諸事件にいくらか関与もしたであろう」。

ジャー・ラマ再出現の事情を理解するために、当時のモンゴル民族運動の实情をここで少し見ておこう。

第一次世界大戦期の「民族自決」の風潮と、特にロシア革命のために、帝國主義列強の干渉や白軍による反革命的画策とも結び付いて、ロシア居住のブリヤート人やカルムイク人の間で民族運動が活発化した。「滿蒙独立運動」(一九二二年及び一六年)^③に失敗した日本は、ブリヤート人を母に持つザバイカル・カザークのアタマン・セミョーノフ^④を支援して、シベリアで「大モンゴル国」建設運動を起こさせた。彼は一九一九年二月にチタで「大モンゴル国」建国大会を開き、内モンゴルのネイセ・ゲゲンを首班とする臨時政府を組織した。外務大臣にジャムツァラーノ^⑤を欠席のまま任命し、財務大臣

を不参加のハルハに割り当てるなど、一応モンゴル諸族代表政府の体裁を取ったが、ハルハの不参加と共に、この時西部モンゴル諸族が除かれた点は注目すべきである。ハルハの不参加理由は、磯野富士子氏が指摘しているように、おそらくハルハが運動の主導権を内モンゴル人やブリヤート人の手に握られるのを嫌ったためであろう。

この「大モンゴル国」は、日本がコルチャック政権との関係でセミノフへの援助を打ち切ったことや、一九一九年夏のカラチン族の反乱、一九二〇年初めのネイセ・ゲゲンの反ロシア人蜂起など、内部分裂でまもなく解体してしまった。⑥
 当時はまだモンゴル民族内部の種族間の対立が充分に克服されていなかったたのである。

ブリヤート人やカルムイク人の民族運動の利用は、少数民族出身の革命家を中心に、ソヴィエト側でも検討していたようである。例えば、アムル・サナンは、イランやアフガニスタンのムスリム同様、東方仏教世界のモンゴル人仏教徒が世界革命で重要な役割を果し得ると訴えた。彼によれば、東方は目覚めつつあるが、ヨーロッパ人が入って行くのはまだ不可能である。しかし血と宗教と言語の絆で何百万ものモンゴル人仏教徒と結ばれているカルムイク人には可能である。モンゴルと地理的、宗教的につながるチベットに、さらにインドにもソヴィエトの影響を及ぼすことができる。「イギリスを大いに怒らせたベテルブルグの仏教寺院の創立者、蒙露親善の支援者で、現在カルムイク・ステップにいるハンボ・アグヴァン・ドルジエフは、カルムイク・モンゴル人の間でソヴィエトのために政治宣伝を行なっている」。

またオイラーツキも、「仏教的東方への門としてのモンゴル」⑦という論文において、次のように訴えた。

「数世紀の間僧侶階級の抑圧に苦しんできたモンゴルは、ソヴィエト政府の思想宣伝とプロレタリア文化の普及に最適の土壌である。……モンゴル人と血縁関係のあるカルムイク人を通じて同族の言語で社会主義革命思想をモンゴル人の間で宣伝煽動することは、ソヴィエト政府には困難なことではない」。

このようにソヴィエト側にも「汎モンゴル主義」あるいは「汎ラマ教主義」的傾向を持つ民族運動を世界革命の一環に位置付けて積極的に取り込むべきだという主張があった。これは少数民族出身の革命家たちから提起されたものであろう。

が、後述するコミンテルンの「モンゴル・チベット支部」創設と考え併せると重要である。ジャー・ラマの再出現ともな
んらかの關係があったとみるべきではないだろうか。

一九一八年夏にザサクト・ハン部北部のセレンガ河畔に再び現われたジャー・ラマは、一度は住民の支持を失ったにもか
かわらず、またもや住民大衆に歓喜と崇拜の念を持って歓迎された。これはロシア革命後のモンゴル情勢の変化のため
である。キャフタ協定で宗主権を承認された中国が、ロシア革命の混乱に乗じて外モンゴルの完全回復を企て、特に同年
五月の「日中陸軍共同防敵軍事協定」によりその対モンゴル政策が大きく転換されて、九月には綏遠軍二營が庫倫に進駐
するなど、彼が現われた頃のモンゴル情勢は緊迫の度を加えていたからである。

ジャー・ラマは、一九一二年のコブド戦以来の友人ジャルハンザ・ホトクトのもとに向かい、その後ウリヤスタイを経
て南西部のダイチン貝子旗へ行き、しばらく滞在して兵を集めた。

ジャー・ラマは最初庫倫と關係を結ぼうとしたが、庫倫政府側は彼を呪逐した上、彼の逮捕を指図した。^⑫これは、コブ
ドで再び人望を得た彼がボグド・ハーンの對抗勢力と見なされたためであろう。ゴンゴルは、ジャー・ラマが「自治モン
ゴルのハーン、ボグド・ジェブツンダンバと権力を奪い合う有害な考えを抱いていた」と述べている。^⑬

彼は、追求を逃れて庫倫政府の手の届かない地方へ移住することにし、コブドから約三百露里〔約三百二十キロ〕離れた
西部南端中蒙国境付近のマージン山に引き籠った。要塞を建設した彼は、周囲に帳幕約五百を集めて旗を組織し、約三百
名の軍隊を編成して、あたかも独立した一小国の觀を呈した。^⑭

一九二六年にジャー・ラマの廢墟を訪れたオーエン・ラティモアによれば、ジャー・ラマは陰謀を恐れて西方へ逃れ、
新疆省長〔楊增新〕に友好を示してしばらくチェン付近に留まった後、おそらく新疆省長の承認を得て、「三不管」と呼
ばれる地方の「宮坡泉」へ移った。「旗の井戸」を掘り当てて黒ゴビの横断を可能とした彼は、中国貿易振興を最大の目
的として、新疆省長の了解を得て隊商の通行を促進し、自分の軍隊に護衛させたという。^⑮だがここには、なぜ彼がモンゴ

ル独立の敵であるはずの中国当局と友好を結んだのか、何ら説明されていない。

当時のジャー・ラマについては、「盗賊の首領」として描かれる傾向がある。例えば、ユーリ・レーリヒは、この頃彼が中国敗残兵やモンゴルの山賊、チベットの密輸業者、キルギスの馬泥棒、トルグートの獵師といったあらゆる無法者たちを集めて、盗賊の首領となったと述べている。またディラヴ・ホトクトは、阿片栽培の中国人を抱えてかなりの収入を得ていたとも言っている。ハズルンドなどにも同様の叙述が見られる。これらの証言ではジャー・ラマの「盗賊の首領」の一面が強調されるが、当時の治安状況や経済流通事情などを考えれば、必ずしも否定的要素ばかりではないだろう。^④

ジャー・ラマが新疆省長と友好関係をもっていた親中国派の人物と見なすラティモアやレーリヒなどの見解は、レーリヒ自身が述べているように、一九二〇年春に西南モンゴルで中国人を襲撃して多大の損害を与えたことを考えると納得できない。中立政策を採っていた新疆省長楊增新とは、ソ連も経済封鎖打開のために一九二〇年六月に通商関係を結んでおり、ジャー・ラマが楊増新と経済関係があったとしても直ちに親中国派だとはいえない。^⑤

また彼がウンゲルン軍に協力したという話もあるが、これも疑わしい。なぜならジャー・ラマがウンゲルン軍に味方してウリヤスタイにやって来るといふ噂に反して、彼はむしろウンゲルン軍と結ぼうとするモンゴル人を非難してザザクト・ハン部に留まっていたと、当時西部モンゴルに滞在していたブルドゥコフが証言しているからである。^⑥

以上のようなジャー・ラマに対する過小評価や悪評は、彼が排除された後にソ連やモンゴル人民共和国で生み出されたものか、あるいはジャー・ラマに恨みを持つ中国人の立場からの見解であろう。

① Мейсхуи, *указ. соч.*, стр. 258.

② 一九一八年三月五日にアストラハン県ソヴェニート第一回大会が開かれた。*Отечественные Известия АССР. Школа коммунизма* (Москва, 1970), стр. 43, 46. 『カルムイク自治ソヴェニート社会主義共和国史概説 社会主義期』。

③ 栗原健編著『対滿蒙政策史の一断面』（原書房、一九六六年）第六章参照。

④ 等原十九司・金子久夫「セミョノフ自伝『自分のことー回想、思索そして結論ー』」一〜四『宇都宮大学教育学部紀要』第三二、三四〜三六号第一部、及び高橋治「派兵」第一〜四部（朝日新聞社、一九

七三～七七号) 参照。

- ⑤ Robert A. Rupen, "Cyben Zamcaranovi' Zamcarano (1880-1940)," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol. 19 (1956), 及び同 "The Burjat Intelligentsia," *The Far Eastern Quarterly*, Vol. 15, No. 3. 参照。

- ⑥ 磯野富士子『モンゴル革命』(中央公論社 一九七四年) 九五頁。

- ⑦ 細谷千博『ロシア革命と日本』(原書房 一九七二年) 第三章参照。

- ⑧ Korostovetz, *a. a. O.*, S. 294-295. 高山訳、前掲書、四七三～四七四頁。

- ⑨ A. Amyr-Canan, "Kliuch Vostoka" *Kuznetz Nauchno-Issledovatel'skii*, No. 19 (27). 1919. 『東方の鍵』『諸民族の生活』。英訳 Xenia J. Eudin & Robert C. North, *Soviet Russia and the East 1920-1927* (Stanford, California, 1957), p. 199. アメル・サナン(一八八八～一九四〇)はカルムイク人革命家で、一九四〇年にスターリンの粛清に倒れた。

- ⑩ Osharekii, "Montozna, kak popora byalisticheskogo Vostoka," *Kuznetz Nauchno-Issledovatel'skii*, No. 26 (34) 1919.

- ⑪ 関寛治「一九一八年日中軍事協定成立史序論」『東洋文化研究所紀』

二 モンゴル人民党のコブド対策

一九一九年六月に安徽派の徐樹錚が「西北籌邊使」として、十月末に庫倫に到着するや、武力威圧して、翌年一月一日に自治撤回の式典を行なった。徐樹錚の高圧的なやり方は、モンゴル人の民族意識を一層高揚させた。

「外蒙自治取消」という事態を迎えて、スフバートルらの「東庫倫グループ」と、チョイバルサンらの「ロシア領事館台地グループ」が一九二〇年六月に合流して、モンゴル人初の革命組織「モンゴル人民党」が結成された。前者には下級

要』第二六冊、及び菅原十九司「日中軍事協定と北京政府の『外蒙自治取消』」『歴史学研究』五一五号(一九八三年) 参照。

- ⑫ Matckii, *uzak. sov.*, стр. 258.

- ⑬ Гонор, *емих зохиол*, 107-р тат.

- ⑭ Matckii, *uzak. sov.*, стр. 258.

- ⑮ Owen Latimore, *The Desert Road to Turkestan* (Boston, 1928), pp. 237-239.

- ⑯ Roerich, *op. cit.*, p. 230.; Latimore & Isono, *op. cit.*, p. 167.; Henning Haslund, *Men and Gods in Mongolia* (London, 1935), pp. 150-158.

- ⑰ 渡辺龍策『馬賊社会史』(秀英書房 一九八一年) など参照。

- ⑱ Roerich, *op. cit.*, p. 230.

- ⑲ Соенко-Кумачевские отношения 1917-1957 (Москва, 1959), стр. 47-49. や華企雲編『新疆問題』(上海 一九三二年) 一二〇～一二二頁、入江啓四郎『支那辺境と英露の角逐』(ナウカ社 一九三五年) 四一四～四一六頁も参照。

- ⑳ Буряков, *В степи и новой Монголии*, стр. 214.

官吏が多く、後者にはラマが多かった。^② 当時の緊迫した情勢は彼等を革命派へ駆り立てた。「黨員の従うべき誓約書」には、「外モンゴル人民党の目的は、宗教と民族を害なう凶悪なる敵を一掃し、剝奪された権利を取戻し、国家と宗教を、真心を持って固め興し、民族のもとを失うことがないようにまもること、誠意を持って内政を改め、何よりも貧しい牧民大衆の利益を優先すること、および、内政権を永久に擁護し、圧迫、被圧迫の悲遷のない生活を大切と考える」と書かれ、民族統一戦線の色彩の濃いものであった。

この両グループの合流を仲介したのは庫倫在住ロシア人革命家で、彼らを通じてモンゴル革命家はソヴィエト政権とコミンテルンに接近した。一九二〇年四月の極東共和国樹立後、六月にイルクーツクでロシア共産党中央委員会シベリア局に「東方人民部」が創設され、七月半ばにボリソフがコミンテルン代表としてモンゴルにやって来た。彼の斡旋でモンゴル人民党代表がイルクーツクを訪れた一九二〇年八月頃、東方人民部の下に「モンゴル・チベット支部」が設置されたが、モンゴルとチベットがひとまとめとして扱われた点は、「汎ラマ教主義」を想起させて、非常に興味深い。

人民党の代表がソヴィエトを訪れている間に、モンゴルでは中国軍が弾圧を強化し、マクサルジャブらも投獄された。シベリア内戦で赤軍に追われたウンゲルン軍は、モンゴルを反革命の基地に選んで攻撃を加えて来た。^③ 一九二一年二月に庫倫占領に成功したウンゲルンは、モンゴル人の歓心を知うために自治復活を宣言して、一九二二年二月にボグドの復位式を行ない、首相にジャルハンザ・ホトクトを、軍事大臣にマクサルジャブを任命した。一方でボルシェヴィキとユダヤ人を虐殺して、恐怖時代を現出した。^④

同じ頃、西部諸都市では、シベリア内戦を逃れて来たロシア人や白軍残党の数がますます増大していた。カルムイク人カザーク隊長カイゴロドフは、コブド地方で最初の白軍を組織した。フブスグル湖南端のハトガルでは、カサグランディ大佐がイルクーツク方面から退却して来たカザーク部隊を再編成した。三月末にカイゴロドフがコブドを攻撃し、これを占領した。ウリヤスタイには、三月半ばに中国軍が自発的に撤退した後、ウンゲルンのドモジロフ部隊がやって来た。

このように西部辺境で白軍が短期間に中国軍を追い出して勢力を保持できたのはなぜであろうか。それは、西部辺境住民には、反中国親ロシア感情が強く、白軍が中国の支配から自分たちを救ってくれる「解放軍」に思われたからである。

白軍のモンゴル侵攻という新たな事態に直面して、スフバートルらは二月初頃からモンゴル人民義勇軍の募集を開始した。^⑧人民義勇軍は募兵を続けながら次第に攻勢に移り、三月十八日にはキャフタを解放して、モンゴル国境へ迫った。

三月一日から三日間デード・シベールで開かれた人民党第一回大会の承認した第一次綱領は、次の規定を含んでいた。^⑨

(一) モンゴル諸族の権利回復。

(二) 将来モンゴル人民が統一国家を形成すること。

(三) 当面中国の支配を打倒して自治外モンゴル国家の再興を目標とすること。

(四) 外国の侵略を防衛する有効な方法としてモンゴルが連邦制の中国に加盟するのを拒否しないこと。^⑩

綱領起草者ジャムツァラーノはコミンテルン代表でもあったが、ブリヤート人の彼が目標としたものは、全モンゴル民族の解放と統一国家建設であって、決してハルハ族の解放とハルハ・モンゴル国家の建設などではなかったはずである。

七月八日の庫倫解放により、西部は白軍にとって一層重要性をもつことになった。というのは、ハルハ族に対する西部モンゴル諸族の種族的違和感を利用して分離独立運動を煽動し、彼等を庫倫新政府に対立させて味方に引き入れ、このモンゴルの反政府勢力と結んで反革命の拠点とすることができると考えられたからである。^⑪

人民党・政府は、三月末にモンゴル軍副司令官スミヤー・貝子を長とする西部平定特別軍約四十五名を派遣した。^⑫イリ出身のスミヤー・貝子は、一九一二年にモンゴルへやって来て、一九一三―一五年に中国軍と戦って貝子に取り立てられ、トシェート・ハン部の一旗長となった。牧民訴訟の対象にもなった人物であるが、義勇軍に身を投じ、軍事的手腕を買われて副司令官となっていた。^⑬四月末頃にスミヤーと分隊長ブンツァクの争いが起きたので、五月二十日に人民党・政府は、新たにチヨイバルサンを副司令官、ブンツァクを副官、ダリザブを分隊長に任命した。^⑭

白軍による西部支配の危険性に気付いた人民党・政府は、西部モンゴル諸族に党・政府の考えを宣伝して白軍を追放するために、四月九日に隊長ハスバートルと党思想宣伝大臣ダンバドルジを西部に派遣した。^⑮ハスバートルは、高位のラマで勇敢な軍事専門家であり、トルボ・ノールの戦いで戦死を遂げる。ダンバドルジは、後に党委員長になり、二十年代末に「右翼偏向」者として失脚する。

この時、バイカロフの卒いるソヴィエト赤軍と、コミンテルン極東書記局代表のブリヤート人ナーツォフ（シレン・シイジェエロフ）が同行した。ナーツォフは、後にタンス・ウリヤンハイでも重要な役割を果たした人物である。^⑯

彼らは五月末にコブド地区に到達し、六月にまる半月かかって「モンゴル人民党西部辺境政治局」をウランコムに設立した。^⑰コブド地区で最初の党政治局がウランコムに設立されたことに注目したい。ウランコムのモンゴル人はトルベートル族で、すでに述べたように、一九一二年にいち早くハルハへの統合に同意しており、少なくともその支配層の間ではハルハに対して比較的違和感が少なかったようである。人民党・政府は西部モンゴル諸族間の複雑な感情を利用して、コブド地区への浸透をはかったのである。

- ① 徐樹錚の「西北邊境弁法大綱」は、李毓澂『外蒙古撤治問題』（台北、一九七一年再版）二三七～二四三頁参照。
- ② *Монгол Ардын үндэсний хувьсгалын анх үүсгэж байгуулагдсан мөч түүх*（Улаанбаатар, 1979）, 272-274-р тат. 『モンゴル人民の民族革命の発端と成就の略史』（二七二～二七四頁。以下 *Анх үүсгэж байгуулагдсан мөч түүх* と略す）。
- ③ チョイバルサン他著、田中訳、前掲書、二七頁。
- ④ E. M. Даревская, “Русские революционеры в Монголии,” *Олон Усын монголчу эрдэмтний 2 их хурал*, I.（Улаанбаатар, 1973）, 160-165-р тат. 『モンゴルのロシア人革命家』（第二回国際モンゴル学者大会）第一冊参照。
- ⑤ C. Дамдинсүрэн, “М. А. Х. Н. ба Коминтерний хамтгай амжилтаар, интернационалч уламжлалт,” *М. А. Х. Н. ба Коммунизм Уимернационал*,（Улаанбаатар, 1979）, 56-57-р тат. 『モンゴル人民党とコミンテルンの共同事業と国際主義的伝統』（『モンゴル人民革命党と共產主義インターナショナル』五六一五七頁、拙訳「コミンテルンとモンゴル人民革命党」『モンゴル研究』第六号（大阪外大、一九八三年）一〇八～〇九頁）。
- ⑥ ウンゲルン軍約二千名のうちロシア人は約三百名に過ぎず、他はチベット人、中国人、日本人その他からなつた。*The China Year Book 1923*（Shanghai, 1923）, p. 675.
- ⑦ L. Forbath, *The New Mongolia*（London, Toronto 1936）, pp.

161-170. 一九二〇～一九二一年にモンゴルに滞在したハンガリー人デレタの生々しい証言が見られる。ズラートキンによれば、一九二一年二月四～八日に親ボルシェヴィキのロシア人・モンゴル人約八十人とユダヤ人約四十人が殺された。Заткин, указ. соч., стр. 167.

⑧ 義勇軍兵士の実像は『モンゴル人民義勇軍兵士の回想録集』全二巻で示されている。Монгол ардын журамт цэргийн дурдмгарууд, 2 бонгод (Улаанбаатар, 1961 & 1966). 以下 Цэргийн дурдмгаруудを略す。

⑨ М. А. Х. Н. Ардын хувьсгалын цаашир тэцээд (Улаанбаатар, 1971), 12-18-р тал. 『モンゴル人民革命党の人民革命勝利のための闘争』。

⑩ Ринчино, “К вопросы о национальном самоопределении Монголии в связи с задачами китайской революции,” *Револуционный Восток*, No. 2 (1927). 「中国革命の課題との関連におけるモンゴル民族独立問題に寄せて」『革命の東方』第二号、及び二本博史「ダムバンドルシ政権の内モンゴル革命援助」『一橋論叢』第九十二巻第三号参照。

⑪ 磯野、前掲書、一七四頁。

⑫ Ахх үүсэж байгуулагдсан мөнч түүх, 209-р тал.

⑬ Ардын засгийн бичиг, 139-143-р тал, 及び Цэргийн дурдмгарууд,

II, 523-524-р тал. 参照。

⑭ Ахх үүсэж байгуулагдсан мөнч түүх, 220-221-р тал.

⑮ Мөн тал, 213-р тал.

⑯ ロストヴィエツはハスバートルとジャー・ラベとを混同して、ハスバートルを「アムルサナーの化身」と考えた。Korostovets, a. o., S. 311. 高山訳、四九九～五〇〇頁。

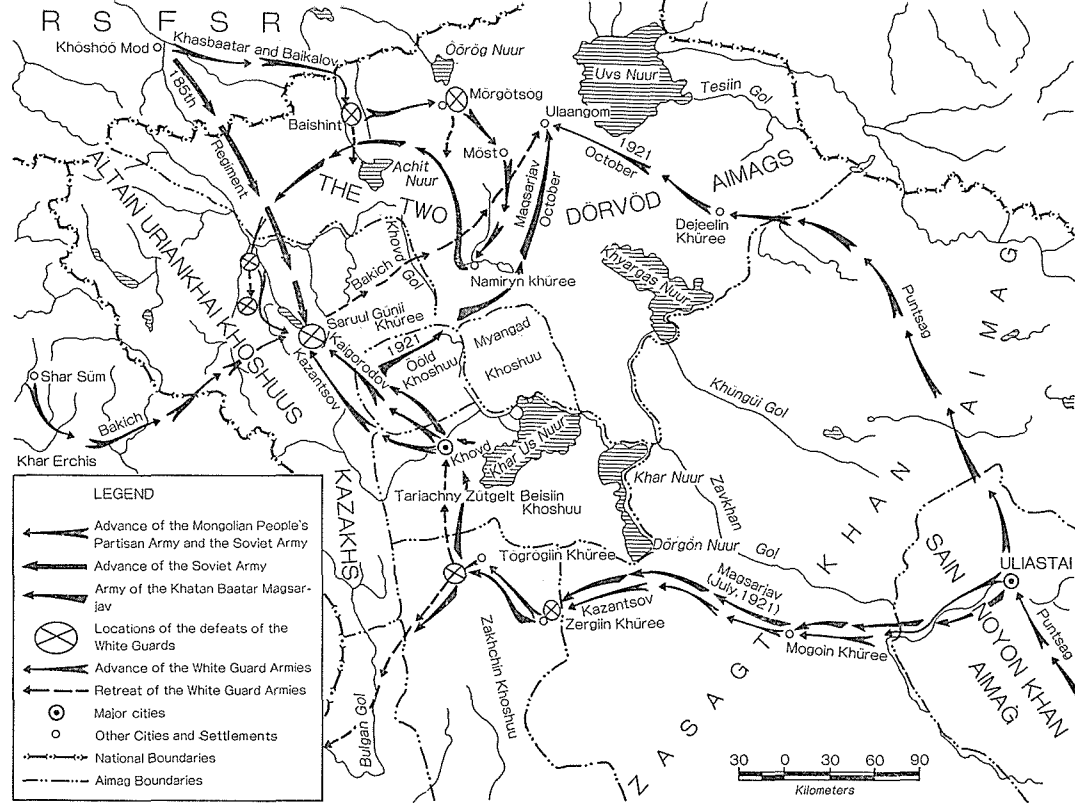
⑰ シェン・ナツォフ (一八九八～一九四三) は、一九二〇～二一年にロンドン極東書記局代表としてモンゴル西部へ、一九二六～二七、三〇～三一年にモンゴル革命青年同盟と党中央委員会を活動した。“Западная Монголия,” *Новый Восток*, No. 4 (1923). 「西部モンゴル」『新東方』。他にモンゴル・ウリヤンハイなどに関する多数の論文がある。Ripen, *Mongols of the Twentieth Century*, Part 2, pp. 77-78. 参照。またナツォフはソビエト人民共和国のダ・グ・ウ長官に就任している。David J. Dallin, *Soviet Russia and the Far East* (Yale Univ. Press, 1948), p. 86. 直井武夫訳『ソ連と極東』上巻 (法政大学出版局、一九五〇年) 一一九頁。

⑱ Цэргийн дурдмгарууд, II, 670-р тал. (С. А. Напов の回想) 及び “Западная Монголия,” *Новый Восток*, No. 4, 1923, стр. 156-157. 参照。

第四章 ジャー・ラマの排除とコブド地区の統合

一 ジャー・ラマの静観とマクサルジャブの決起

ザザクト・ハン部の中心都市ウリヤスタイを支配したドモジロフらの白軍も、ボルシェヴィキとユダヤ人の逮捕・虐殺を行ない、ブルドゥコフ一家も捕えられた。彼等の残虐行為はオッセンドウスキーのような白軍側の人さえも認める程で、^①



中国軍から「解放」してくれた彼等に対してモンゴル人の不満と憎悪も急増していった。そして当時なお西部諸都市で軍事的に優勢な白軍に対して、人民党・政府が攻勢に移る契機となったのが、「マクサルジャブの決起」である。

これに対してジャー・ラマは西部で白軍とモンゴル・ソヴィエト連合軍の戦闘が続いている間、じつと様子を窺っていた。一九二一年初秋に、彼は情勢を窺いに兵二百名を連れてザザクト・ハン部へやって来たが、白軍が放逐されるまで再びマージン山に引き籠ってしまった^②。マクサルジャブとは対照的に、ジャー・ラマは静観していたのである。

ウンゲルンの再建したボグド政府で軍事大臣に任命されたマクサルジャブは、西部辺境平定大臣ジャルハンザ・ホトクトに続いて、五月頃西部モンゴル軍総司令官として西部に派遣された。これはウンゲルンがマクサルジャブを信頼せず、キャフタ奪回の攻勢に出る前に西方へ遠ざけたためだとされる。ウリヤスタイでウンゲルン軍のモンゴル人部隊（隊長ブリヤート人バンダノフ）と共にキャンプした彼は、七月二十二日夜にバンダノフ軍を襲撃し、これを制圧した^④。

サイン・ノヨン部生まれのマクサルジャブ（一八七八～一九二七年）は、一九〇三年に父の死去により協理公の位を世襲し、一九〇五年と一年にコブドで「ハルハ・ジャサ」^⑤を務めたことがきっかけで一九一二年のコブド戦で功績をあげ、「ハタン・バートル」の称号を授けられた。彼はその後内モンゴルで中国軍と戦い、一九一五年に東南辺境平定大臣に任命され、翌年にはバブージャブ軍とも交戦した。一九一七～一八年に西南部辺境へ、一九一九年にはタンヌ・ウリヤンハイ平定大臣として西北辺境へ出征した^⑥。同年七月に、タンヌ・ウリヤンハイでシチエチキンのソヴィエト・バルチザン部隊と遭遇した時、シチエチキンが白軍に対する共同行動を申し入れたところ、彼はタンヌ・ウリヤンハイからロシア・コミッサールとカザーク部隊が引き揚げることを要求したようなナシヨナリストである^⑦。

マクサルジャブは、人民義勇軍に参加していた自分の息子を通じて、一九二一年六月に密かにチヨイバルサンと連絡をとっていた^⑧。スフバートルも、七月初に西部辺境平定大臣ジャルハンザ・ホトクトに書簡を送って、白軍との戦闘を呼び掛けた^⑨。マクサルジャブ決起の前には人民党からの接触があり、彼はそれに答えて党・政府側へ接近して行ったのである。

王侯出身の「モンゴルの伝統的なナシヨナリストの系譜の上に位置付けられる典型的人物」である「ハタン・バートル」が党・政府側に立ったことは、一九一二年のコブド戦以来の「西部の戦士」^⑩としての彼の軍事的名声によって、西部住民の支持を得るのに大いに役立った。

ここで、一九二一年段階のジャー・ラマとマクサルジャブの態度に大きな相違が見られることに気付くであろう。マクサルジャブが人民党・政府の呼び掛けに答えて決起したのに対して、彼と同じ「モンゴルの伝統的なナシヨナリストの系譜の上に位置付けられる典型的人物」のひとりと考えられるジャー・ラマは、なぜ人民党・政府に与せずに動静を見守っていたのであろうか。またマクサルジャブが革命後も政府の要人であり続けたのに対して、ジャー・ラマがボグド政府にも人民党政府にも追われる身となったのも対照的である。現在のモンゴルではマクサルジャブが階級的に早く目覚めた人物として描かれる傾向があるが、彼の出身と行動から見て、この考え方にはやや無理がある。

一九一二年のコブド戦で活躍した二人のその後の運命を決定したのは、コブド問題に対する両者の態度の相違であると思われる。更に検討を要するが、そのポイントには、モンゴル民族独立運動のイニシアチブをどの種族が握るかという点ではないだろうか。両者とも、コブド地区を含む独立を主張するが、第二章でみたように、ジャー・ラマがオイラト人の住むコブド地区を中心にモンゴル族の統一を目指すのに対して、マクサルジャブはハルハへの統合を目指す。マクサルジャブもハルハ・モンゴル人としてその利害と感情に無関係ではいらなかったからである。

人民党・政府は、すでに四月に「白軍と中国軍を国土から一掃することに關してトルバート部盟長たちに送った文書」で、「西部边境平定大臣」と「西部边境軍總司令部」の設立と協力を訴えていた。^⑪しかし実際には人民党・政府の影響はなかなか浸透せず、白軍の優勢はなお揺るがなかった。この苦境を打開したのがマクサルジャブの決起であった。

マクサルジャブ決起直後の七月末には、ハスバートル、ダンバドルジ、ナーツォフらの活躍で、ウランコムスの「モンゴル人民党西部边境政治局」がその西北約二十五露里〔約二十七キロ〕のムストへ移されると同時に、「モンゴル西部边境人

民政府が樹立された。その首相にトルベート族のダライ・ハン・トゥメンデルゲルジャブ、副首相にゾリクト・ハン・ソドノムジャムツ、内務大臣にグン・アヨールザナ、副内務大臣にダンバドルジ、外務大臣にダー・ラマ・モロム、副外務大臣にナーツォフ、全軍司令官・軍事大臣にハスバートル、副軍事大臣にワン・サムダンがそれぞれ任命された^⑮。この人事は、首相にトルベート・ハンを選出するなど、コブド地区住民を人民党の側に引き付けるために譲歩したものであるが、ダムバドルジらを配することにより、その実権は人民党の手中に収めようとしたのである。

「モンゴル西部辺境人民政府」は、八月二日に「モンゴル人民党西部辺境政治局」と連名で『西部辺境人民大衆への檄文』を発表して、白軍との戦闘と党・政府への協力を呼びかけた。^⑯

「西部辺境勤労人民大衆の積極的支持なしに西部辺境に居座っているロシア白軍を一掃しなければ、我々の前にいる困窮した人民大衆をその軍隊から解放することができない……東部モンゴルとタンヌ・ウリヤンハイから我が兄弟が赤旗を掲げて、途中で遭遇した部隊を容赦なく撲滅して我々を援助するために急いでやって来た」^⑰。

八月中にモンゴル西部辺境人民政府軍はコブド河まで解放できたが、九月にはウリヤスタイや新疆で敗れたカイゴロドフとアタマン・カザンツェフ軍約五千名及びバキチ將軍の部隊約千名が、コブド付近に結集してきた。

十月十七日から約一ヶ月半にわたってコブド北西約百露里〔約一〇七キロ〕のトルボ・ノール湖畔にあるウリヤンハイ族サロールノ公寺廟で、約四百名の西部辺境人民政府軍が包囲された。しかし十一月頃から勢力を増して優位に立ったモンゴル・ソヴィエト連合軍は、トルボ・ノールの包囲を解いて白軍をモンゴル国外へ敗走させることに成功した。カイゴロドフ軍は、ロシア・アルタイで全滅した。カザンツェフはウリヤンハイで殺害され、バキチはウランコムでマクサルジャブに捕えられて、庫倫でソヴィエト軍に引き渡された。

このようにマクサルジャブの決起と「モンゴル西部辺境人民政府」の設立によって西部住民の支持と協力を確保したことで、及びソヴィエト赤軍の強力な援助を得たことで、一九二二年春頃までに白軍の脅威はほとんど取り除かれた。そして

白軍の一掃と同時に、静観していたジャー・ラマが次に「反革命」勢力として排除されることになるのである。

- ① F. Ossendowski, *Tyere Menschen und Götter* (Frankfurt am Main, 1923) 神近市子訳『動物と人と神々』（生活社、一九四〇年版）& Domitri Alishin, *Asian Odyssey* (New York, 1940) などに参照。

- ② Lattimore & Isom, *op. cit.*, p. 168.

- ③ 磯野富士子『モンゴル革命』一七七頁。

- ④ この決起に参加した兵士の回想が『モンゴル人民義勇軍兵士の回想録』にいくつも載っている。またブルドゥコフの回想にもこの模様が語られている。Бурдаков, *В степях и новой Монголии*, стр. 194-205.

- ⑤ 「ハルハ・ジャサ」はコブド参贊大臣の下に置かれたハルハ諸部の代表機関。その長官はサイン・ノヨン部の公が六ヶ月交替で任命された。その主な任務はハルハ四部の義務遂行の監視であった。Гоним, *огних зохиол*, 69-70-р. тал.

- ⑥ Шириндзев, *Ардын Хамгаалагч Марсхужав намтар*. にはベクサルジャブの出征地図が附されている。タンヌ・ウリヤンハイに対する当時のモンゴル人支配層の気分を、矢野仁一氏は次のように代弁している。「晩くも十七世紀以来彼等の間に行はれ、今猶ほ継続して居る蒙古化という現象は、蒙古の烏梁海に對して有する支配的勢力の標徴に外ならぬ。蒙古は烏梁海に於て生きて居るのである。烏梁海は純粹な蒙古種族でなくとも、それだから蒙古でないといふ」理由は立たないのである」(前掲書、二二頁)。

- ⑦ Майсний, *указ. соч.*, стр. 260. 赤軍からベクサルジャブへの書簡

⑧ Ардын Хамгаалагч Марсхужавын ачирал улс эсвэлдээгээс холдоходоо баруун бүсүүд (Улаанбаатар, 1980), 49-54-р. тал. 『人

民の不屈の英雄マクサルジャブの生涯と業績に関する史料集』四九～五四頁にある。

- ⑧ Шириндзев, *указ. соч.*, стр. 40.

- ⑨ Д. Сүхбаатарын улс андранмай хөдөөдөх баруун мангучаах эхнээс (Улаанбаатар, 1964), 70-72-р. тал. 『ホ・スフ・ハの生涯に関する史料集』。以下 Д. Сүхбаатарын баруун мангучаах эхнээс 略す。

- ⑩ 田中克彦『草原と革命（品文社、一九七一年）一七六頁。

- ⑪ Owen Lattimore, *Nomads and Commissars* (New York, 1962), p. 79. 磯野富士子訳『モンゴル——遊牧民と人民委員——』（岩波書店、一九六六年）八八頁。

- ⑫ マクサルジャブはツェレンドルジと共に封爵を自発的に返還した人物として高く評価されている。西川孝雄「外蒙王公の封爵調停問題——チェリン・ドルジの場合——」『愛知大学文学論叢』二七号参照。

- ⑬ 前掲のチョイバルサンやシレンデフによるベクサルジャブの伝記参照。

- ⑭ Ардын Засаглас 1921-1924 оноод басаах хуьсгаал арга хэжжээгүүд (Улаанбаатар, 1964), 12-13-р. тал. 『人民政府が一九二一～一九二四年に行なった革命的方策』。以下 хуьсгаал арга хэжжээгүүд と略す。

- ⑮ Цэгэйн дурдлагагүүд, II, 670-671-р. тал. 一九一九年六月の科布多佐理員洪積の書簡によれば「杜爾伯特與喀爾喀原不同宗、且歷史上有仇怨。……杜爾伯特王公中、甘心為虎作偵者、僅今達資汗圖們德勒格爾札布及外蒙所封卓克圖汗索特那木札布柴均、餘雖尚有二三附和其事者、究皆出於彼脅、非其本意。」とある。中央研究院近代史研究

所編『中俄關係史料外蒙古（民六年至八年）』（台北、一九五九年）四三五～四三六頁。また陳崇祖も、『外蒙近世史』一六四～一七五頁で、科布多所屬各旗王公の帰附について書いている。これらは過渡期における科布多各旗王公の動搖を示すものであるが、本心では独立を望んでいたのは当然のことである。

⑯ Царский дурмангарууд, II, 671-672-р тал.

⑰ Мон гал, 672-р тал.

二 ジャー・ラマの排除とコブド地区の統合

白軍を打ち破った人民党・政府は、一九二二年二月六日にその代表をコブドに派遣して、「コブド地区のトルベート、アルタイ、ウリヤンハイ、カザフその他のモンゴル諸民族間の兄弟的友好を強固にして、それらが我国と一層強固な連帯を結ぶために」、コブドの「西部边境人民政府」を改組して代表のサイトと軍司令官を任命するように指導することを決めた。この方針に基づいて、二月二十六日に「西部モンゴル平定代表サイト」を、ついで五月に「西部边境軍司令官」を設置した。七月に開催された「コブド边境社会代表大会」では、コブド・サイトに前副首相ゾリクト・ハン・ソドノムジヤムツが、副サイトに前首相ダライ・トルベート・ハン・トゥメンデルゲルジャブが選出された。^②

白軍の排除と同時に「西部边境人民政府」を解体したことは、コブド地区を党・政府の直接的指導下に置くとしたものであるが、それでは、なぜ党・政府は急いでそうする必要があったのであろうか。それは、すでに一九二一年十二月にコブドでサジ・ラマら二百名のラマが、信仰・布教の自由を求めて「反革命陰謀」を起こし、一九二二年二月に鎮圧されるという事件^③が起こっているからである。

またこの頃すでに党内でも亀裂が生じていた。サジ・ラマらを弁護した首相ボドーラの「陰謀」が一九二二年一月に発覚し、同年八月銃殺刑に処された。前首相ボドーや元首相シャグダルジャブ、トクトホ公、大ラマ・ブンツァクドルジ、

⑯ Мон гал, 673-р тал. この戦闘でハスバートルは援軍を求めて包囲を脱しようとして敵軍に捕らえられて殺された。ダンバドルジは、一九二六年にウラン・オトルチという匿名で『トルボ・ノール』を著わして西部解放戦の模様を書き残している。Улан Ойр, Того нуур (Уланбаатар, 1927). 田中克彦『草原の革命家たち』一四四～一五五頁参照。

デンデブ公、ツェヴェーン、兵士アルタンゲレル、ゴンボ、チャグダル、チャハル人アニングーらは、「人民全権政府を打倒して、中国支配下の旧専制政府を樹立するために」、白軍残党や中国軍閥張作霖、張家口のアメリカ領事、ジャー・ラマらと共謀したとされた。特にサンジャーダムバは、白軍と結び、自らダンビ・ジャンツァンと偽って人民大衆を欺いたとして処罰された。白軍一掃後の西部でジャー・ラマが主要な「反革命」勢力とみなされていたことがわかる。

ボドーは「人民革命党が赤い国（ソヴィエト・ロシア）に援助を請うたことは正しいが、内政で赤い国をモデルとすることは誤っている」と述べ、また自らジャー・ラマと接触し、彼にアルタイ・ウリヤンハイの分与を約束したとされる。^⑤

自分の名前が取沙汰されたジャー・ラマは、一九二二年初秋頃ウリヤスタイの方へ情勢を探りにやって来た。当時ウリヤスタイで軍隊を指導していたナンザトの軍総司令官スフバートルへの報告には、次のことが述べられている。^⑦

（一） ダンビ・ジャンツァン・ラマが人民党への入党を望んでいること。

（二） 彼の側についていたヨスト貝子を戻して、代わりにチョイスレン章京を従えて帰ったこと。

ジャー・ラマが人民党に入党を希望していたというのは、特に興味深い情報である。ジャー・ラマ自身は決して人民党を敵視していなかったことがここに示されている。

また同じ頃、ドルジパラムからスフバートルに送られて来た手紙には、次のようなことが記されている。^⑧

（一） 五月にウリヤスタイでザサクト・ハン部ヨスト貝子ミシンドルジが、ダンビ・ジャンツァン側に逃亡したこと。

（二） 仲間のエレクゼン台吉を捕らえて調べたところ、ザサクト・ハン部から多数の者が引き入れられているのがわかったこと。

（三） ザサクト・ハン部の大部分の者が憶病で礼儀知らずなために、その離散が計り知れないこと。

（四） ディロブ・ホトクト・ラマにその対策を相談したこと。

これらから判断すれば、ザサクト・ハン部の大部分の者がジャー・ラマの側に「引き入れられて」いて、党・政府側に

は付いていなかったことがわかる。西部ではジャー・ラマの影響力が非常に強かったことが示されている。

さらにまた別の一九二二年のナンザト、アムガランらの手紙によれば、「ノヨン・ラマはヨスト旗とザサクト・ハン部から数百戸を強奪して中国へ行き、「ソヴィエト・」ロシア以外にこうした武装軍隊を持つようになったので敵であるから、ノヨン・ラマに対して軍隊を動員・派遣しよう」と主張したが、ウリヤスタイ・サイトがジャー・ラマを攻撃することに反対したことは確か^⑨。この意見対立の詳細はわからないが、ウリヤスタイ・サイトがジャー・ラマを攻撃することに反対したことは確かで、彼をはじめ西部住民の多くがジャー・ラマに友好的であったと考えられる。また「ソヴィエト・」ロシア以外にこうした武装軍隊を持つようになったので敵である」という判断は、親ソヴィエト勢力以外をすべて敵、即ち「反革命」派と見なす傾向があったことを示している。

同じ手紙の中で、ナンザトたちは、ジャー・ラマが送って来た手紙の内容を紹介している。ジャー・ラマはその手紙で次のようなことを伝えて来た。^⑩

- (一) 人民党に入党しても党内のことには関与せず、ひたすら外敵と戦うだけだということ。
- (二) ウリヤスタイなどの「白軍殘党の」平定にできる限り努力すること。
- (三) 甘肅省の省長が替わって、五百名の軍隊が派遣されて追い立てられたので、仕方なく「ザサクト・ハン部に」滞在していること。

以上の三通の手紙の内容から判断すれば、「甘肅省の省長が替わって」^⑪という表現は中国当局との接触を暗示させるが、少なくとも一九二二年の時点では、ジャー・ラマが白軍一掃後に旧秩序支持者たちの間で中心人物となっていたとか、新疆やフフホトの中国当局と親交を結んでいたという、ユーリ・レーリヒやラティモアらの記述とは食い違いがある。ジャー・ラマは「人民党に入党しても党内のことには関与せず、ひたすら外敵と戦うだけ」の、マクサルジャブらと同じ「モンゴルの伝統的なナシヨナリストの系譜の上に位置付けられる」人物に過ぎなかった。

ナンザトらの報告を受け取る前にすでに人民党・政府は、一九二二年八月七日付のウリヤスタイ・サイト宛「ダンビ・ジャンツァン打倒に関する文書」に述べるように、「ダンビ・ジャンツァン」という人物は一般にあちこちで噂されている外国の狡猾な悪人で、共戴二年（一九二二年）から狡猾に西部辺境のモンゴル人を欺いて、残忍に人を苦しめ危害を加えたことは数えきれず、彼を辺境付近に一日おけば一日、辺境人民大衆は平和を得ることができない」として彼の排除を決定した。「共戴二年から」「外国の狡猾な悪人」であるという人民党・政府のジャー・ラマに対する判断は、上述の諸報告から考えれば納得できないものである。こうした判断の理由は、ジャー・ラマが根強く西部辺境住民の独立運動のシンボルであり続けたために、人民党・政府の構想するハルハ中心の国家建設に障害となったからであろう。スフバートルは「モンゴル領土を分割しようとした武装した強奪者ダンビジャンツァン」の打倒を指導したといわれる。^⑬

ジャー・ラマ排除のために派遣されたのが、東部辺境軍司令ドゥガルジャブ貝子、内防処長官バルダンドルジ、ナンザトら東部出身の者たちであったのもそのことを暗示している。ジャー・ラマ殺害時の模様は、『モンゴル人民義勇軍兵士の回想録集』第一巻所収のナンザトの回想などに生々しく語られている。^⑭

ナンザトらは、ジャー・ラマ征討の方法をウリヤスタイ・サイトのラムジャブ、副サイトのディロブ・ホトクトらと相談したが、果して本当に殺害できるであろうかと不安であった。結局ドゥガルジャブとナンザトが四人の兵士を連れて先にマージン山の要塞に乗り込み、後からバルダンドルジが二十五名の兵士と機関銃を持って二人を援護することになった。ナンザトに同行した兵士の一人ソドノムダルジャーによれば、一九二二年十二月二十三日にドゥガルジャブ、ナンザトと四人の兵士ソドノムダルジャー、ダシ（ダシゼベク）、ダヴァー、ダムバがまず出発し、後からバルダンドルジが三百名の兵士を卒いていった。^⑮ ジャー・ラマの本拠にどうにかうまく乗り込んだナンザトたちは、兵士の一人ダシに仮病を装わせて、ダンビ・ジャンツァンにラマ医師による治療を頼んで誘き寄せ、彼が差し出した右手をダシが掴み、もう一方の手をドゥガルジャブが掴んで、ナンザトが飛びかかって押し倒し、右頸動脈へ銃で五発射って殺した。^⑯ ジャー・ラマの財産と

武器弾薬はモンゴル軍に徴発され、彼の配下の「奴隸」たちには彼の財産の中から約二千頭の家畜が分配された。^⑦

ナンザトたちがジャー・ラマの首を近くに埋めてウリヤスタイに戻ってくると、ダンビ・ジャンツァンは弾丸では死なないという言い伝えのために、人々が彼の死を信じず、もう一度彼の首を取りに戻らなければならなくなった。^⑧ ウリヤスタイに運ばれたジャー・ラマの頭は「ツァガン・トルゴイ（白頭）」の名で知られ、連日それを見に多くの民衆が集まった。こうして「アムルサナーの化身」ジャー・ラマの神話はここに一応打ち破られることになった。^⑨

当時モンゴルに滞在していたハンガリー人技師ゲレタは、人民政府の最も重要な成功の一つはジャー・ラマの排除であると指摘している。^⑩ 西部モンゴル人の独立のシンボルであったジャー・ラマの排除は、西部辺境コブド地区住民に東部モンゴル人主導の人民党・政府の権威とそれへの統合を承認させることになったのである。

① *Хувьсгал арга хэлбэлээр*, 34-р тал.

② Нанов, “Загалаа Монголиа,” стр. 160.

③ 劉序渭編輯『民国以来蒙古史料彙編』（台北、一九七六年）二一〇頁。現在のモンゴルでは「人民革命により特権を失ったチハット商人やラマを用い、ボグドの密かな支持を得て、ボグド側近の封建層サジ・ラフ・ジャミヤンタンザンを首領とする反革命武装蜂起が準備された」といふ。Л. Бар-очир, Д. Дашжав, *Давдугуйн Сүхбаатар нийтлэл*, Нэгж засварсан гурав дахь хэргэл (Улаанбаатар, 1973), 219-р арр. 『там Дингийн・Смолбортол伝』改訂第三版。

④ *Хувьсгал арга хэлбэлээр*, 138-р тал. なおロストヴィエハツは同文を含む一九二二年九月十二日のモンゴル通信社電の司法大臣声明を紹介している。Korostovetz, a. a. O., S. 330-331. 高山訳、五二七〜五二九頁。

⑤ *Хувьсгал арга хэлбэлээр*, 138-р тал. なお張家口のアメリカ領事ソコビンは首相ボドールと外相ツェレンドルジとの接触を認めてい

るが、ボドールよりも多く接触したツェレンドルジは蕭潜ではなく、その後首相の地位に上った。W. A. Brown & O. Urgunge (tr. & ed.), *History of the Mongolian People's Republic* (Massachusetts & London, 1976), pp. 796-797, n. 45.

⑥ Л. Бар-очир, Д. Дашжав, *өмнөх зохиол*, 246-р тал.

⑦ *Д. Сүхбаатарын бүтэн материалын эхтгэл*, 134-135-р тал.

⑧ Мөн тгэл, 135-136-р тал. なおモレクセン台吉はモスト貝子ツァンタンドジのおじで、赤軍に従属してウリヤンジャー・ラフと組むことと主張したと云ふ。W. A. Brown & O. Urgunge, *op. cit.*, p. 797, n. 48.

⑨ *Д. Сүхбаатарын бүтэн материалын эхтгэл*, 137-р тал.

⑩ Мөн тгэл, 137-138-р тал.

⑪ 甘肅省省長は一九一四年以来の張廣建から一九二〇年十二月に蔡成勳へ、一九二二年十月に潘齡皋へ、さらに一九二二年七月には林鶴光へと替わっている。劉寿林『辛亥以後十七年職官年表』（中華書局、

一九六六年）三八九～三九〇頁。

¹² *Хүснэгт арга хэргэнийг*, 140-р тал.

¹³ *Л. Бар-очир, Д. Даужану, өмнөх зохиол*, 223-р тал.

¹⁴ *Лэпэйн дүрэм*, 1, 461-483-р тал. 磯崎富士子『ギンゴン革命』一九五〇～一九九頁参照。

¹⁵ *Мөн тал*, 620-р тал.

¹⁶ *Мөн тал*, 481-р тал.

¹⁷ *A. Karamikov, Hingonaton-pesovozhiznnoe deizhenie v Mongolii* (Москва, Ленинград, 1926), стр. 60. 『ギンゴンにおける民族革命運動』。なおジャー・ラマの死後、彼の配下の者たちは『ウランバートルに連行された一部の者を除いて、ほとんどの者がもとの旗に帰

終 わ り に

モンゴル人民共和国形成期のコブド問題において、ジャー・ラマの排除は一つの画期となった事件であった。

これを階級的観点から説明すれば、次のようになるであろう。「アムルサナーの化身」として登場したジャー・ラマは、反清独立闘争段階においては、その強烈な民族主義と軍事的手腕、宗教的權威などが相まって大いに活躍する余地があった。彼自身は一九二〇～一三年のコブド解放戦の功績により「ノモン・ホトクト」となり、新興の封建王侯として人民大衆を支配する側に立った。そして人民党結成後は、ジャー・ラマ本人の意図は別にして、その「封建・君主主義的」性格のために、自己変革を遂げない限り、コミンテルンの指導を受けた人民党の革命運動からいずれば脱落せざるをえなかったであろう。運動の主導権が従来の封建層から革命的インテリゲンツィアと人民の側へ移行しつつあったからである。

だがこれだけでは納得できない点があることも認めなければならない。ジャー・ラマの排除は、反革命勢力だけでなく、すべての反政府勢力を排除して、コブド地区をモンゴル人民共和国に統合した事件であったために、その複雑な民族・種

々を行った。Owen Lattimore, *The Desert Road to Turkestan*, p. 240.

¹⁸ *Лэпэйн дүрэм*, 1, 182-р тал.

¹⁹ Roerich, *op. cit.*, p. 233. ホンバ博士によれば、ジャー・ラマの頭蓋骨はソ連アカデミー人類学博物館にある。Rupen, *Mongols of the Twentieth Century*, p. 214, n. 56. またノーリ・レーリビやハズルンドは、ジャー・ラマ排除後もなお彼の不死身の噂が根強く絶えなかったことを述べている。Roerich, *op. cit.*, p. 234; Haslund, *op. cit.*, pp. 157-158.

²⁰ Forbath, *op. cit.*, p. 225.

族關係に由来するコブド問題は未解決のまま残された。そのことは、人民共和國形成後もコブド地区で反政府蜂起が続発したこと、一九四〇年にカザフ族の「バヤンウルギー・アイマク」が設置されたこと、などで証明されている。^①

西部辺境コブド地区は、その住民の大部分が西部モンゴル人、即ち非ハルハであったために、絶えずハルハへの対抗意識と分離独立傾向を内包していた。そのシンボルとなったのが、「アムルサナーの化身」ジャー・ラマであった。ジャー・ラマが人民党に入党を希望しながらも排除されたことは、彼が単に「封建・君主主義的民族主義」者であったということだけでなく、ハルハ、ブリヤートなど東部モンゴル人主導の独立運動の対抗勢力であったことも大きな原因であろう。そのことは同じ「封建・君主主義的民族主義」者であるマクサルジャブの運命が暗示している。

コミンテルンの民族政策は、モンゴル民族としての民族的自覚に基づく解放運動を、当時の革命的課題、即ちロシア革命、中国革命という課題に従属させたが、その際革命運動の主導権が大民族の革命家に握られ、モンゴル側の主体性が軽視せられる可能性が存在したことは否定できない。「汎モンゴル主義」を理由に肅清されたモンゴル人指導者の中には、「大ロシア主義」や「大漢民族主義」の犠牲となった者が少なくない。

一般に、非ハルハ人の間では「汎モンゴル主義」的傾向が強く見られ、モンゴル人民共和国成立後も、ソヴィエト・ロシアや中国領内のモンゴル人の間で根強いものがあつた。人民党内部でも、その指導的地位にあつたブリヤート・インテリゲンツィアの多くが「汎モンゴル主義」的傾向を問われ、一九二八年以降「右翼偏向」として肅清されていく。^②

例えば、ブリヤート人リンチノは、一九二四年の第三回党大会において、また一九二七年の論文「中国革命の課題との関連におけるモンゴル民族独立問題に寄せて」において、牧畜経済とラマ教文化を共通の基盤とする全モンゴル民族統一国家の形成を主張した。これに対してジャムボロンは、一九二八年の論文「モンゴルの民族独立問題をいかに提起すべきでないか（同志リンチノの論文に関して）」^④において、リンチノの主張を「汎モンゴル主義的プチ・ブル・ナシヨナリズム」として弾劾した。とまれ、この問題はさらに検討を要するので、別の機会に論じることにした。

ジャー・ラマとマクサルジャブに代表される如く、民族独立運動に対する非はるは人とハルハ人の態度の相違は、コミンテルンの民族政策とも複雑に結び付いて、モンゴル人民共和国形成期のコブド問題を、一層複雑かつ重要な民族問題としていたのである。

最後に、本稿の試みは、あくまでも、世界で二番目の社会主義国、モンゴル人民共和国における民族問題の、今後のより精密な研究への第一歩となるべきものである。社会主義の発展のためには、民族問題は避けて通れない問題である。社会主義と民族問題を考える上で、今まさに求められている課題、即ち「ナシヨナリズムの物神化ではなくそれを相対化できる、あるいはナシヨナリズムにふくまれる正邪の二面を識別できる高い視点、ナシヨナリズムを理解するがしかし共有はしない視点の確立」^⑤を念頭に置いて、残された多くの課題にさらに取組むことにしたい。

- ① モンゴルの民族学者バダム・ハタンは、モンゴル諸族のハルハへの統合化という一般的傾向と同時に、西部モンゴル諸族になお根強く種族意識が見られ、その原因が人民革命以前の種族間の不平等や抑圧の名残りであることを指摘している。С. Бадам Хатан, "Б. Н. М. А. У. -ын Улдасний ба усаатан хөгжилдйн асуудал", *Shudia History*, Том IX. Fasc. 14. (Улаанбаатар, 1973), 17-р тал. 「ヤン・ハルハ人民共和国の民族及び種族発展の諸問題」。
- ② Манжичня, "Против пропаганды националистической идеологии в Бурято-Монголии гнилого либерализма по отношению к ней."
- ③ Рипчиню, указ. соч.
- ④ Д. Жамбогон, "Как не следует ставить вопрос о национальном самоопределении Монголии", *Революционный Восток*, No. 3, 1928.
- ⑤ 溪内謙「現代社会主義を考える——ロシア革命から二一世紀へ——」(岩波書店、一九八八年)四四頁。

〔付記〕 本稿の作成にあたり、神戸大学教授伊藤秀一、大阪外国語大学教授小貫雅男、同講師村井宗行の各先生及び大阪外大モンゴル研究会の諸氏には、史料の便宜と貴重な助言や励ましをいただいた。末筆ながら記して御礼申し上げる。

(神戸大学大学院博士課程)

l'uniformité de l'enseignement public dans toute la France, 2° la formation de citoyens fidèles et utiles à l'État. Avec la force de l'éducation, Rolland voulut faire disparaître des privilèges régionaux de la société de l'Ancien Régime.

Ayant toujours son plan en tête, il se mit à reconstruire les collèges. La réforme la plus importante fut l'établissement d'un Bureau d'administration dans chaque collège. Ces Bureaux, dont les membres étaient des évêques, des officiers municipaux et royaux ou parlementaires, étaient responsables de la réalisation de l'éducation nationale. Cependant, des disputes entre eux paralysèrent souvent l'enseignement des collèges. De plus, les ecclésiastiques furent opposés aux réformes parce qu'ils eurent peur d'une laïcisation.

Ces réformes ne purent pas avoir de résultats satisfaisants. Mais elles provoquèrent un débat sur l'enseignement. Elles furent les premières tentatives de laïcisation et de nationalisation de l'enseignement.

The Jaa Lama and the Khovd problem

—The national problem in the period of the
formation of the Mongolian People's Republic—

IKOMA Masanori

The aim of this paper is to consider the national problem in the period of the formation of the Mongolian People's Republic (M.P.R.) through the movements of the Jaa Lama (Dambiijantsan), a charismatic Astrakhan Kalmyk Mongol, who appeared as a reincarnation of the 18th-century Oirat leader Amarsanaa, the symbol of the anti-Chinese independent movement in Western Mongolia.

In 1912 he led the fight for the liberation of the Khovd district, but at present in M.P.R. his achievements are largely ignored. Though he seized control of the Khovd district, he lost the support of the inhabitants owing to his impatient Russian method of the reform. Moreover,

he was arrested and deported to Russia by the Tsarist government because of his strong inclinations towards independence.

When he was set free, thanks to the Russian Revolution, and went back to Mongolia in 1918, he was welcomed by the masses again, but was regarded as a rival by the Bogd Khaan's government.

A comparison of the careers of the Jaa Lama and the Khatan Baatar Magsarjav, who had been a leading person of both the Bogd Khaan's and the People's government, suggests that the Jaa Lama was assassinated in 1922 by the People's government more as an adversary to the leadership of Eastern Mongols than as a "feudal-monarchic nationalist."

The assassination of the Jaa Lama enabled the Khovd district to be united with Khalkha Mongolia, but the Khovd problem resulting from the complicated national relations was left unsolved.